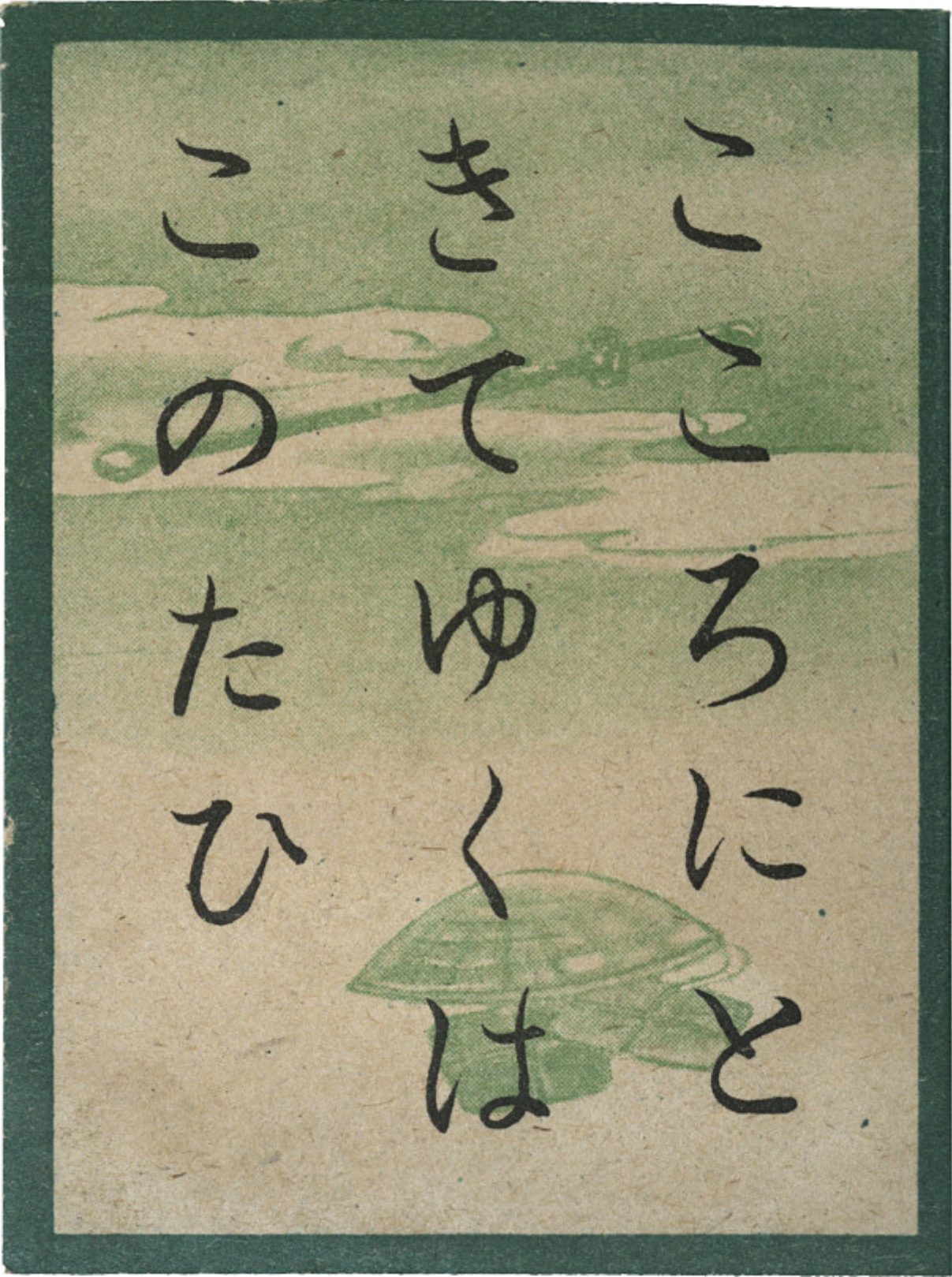
こころのみ

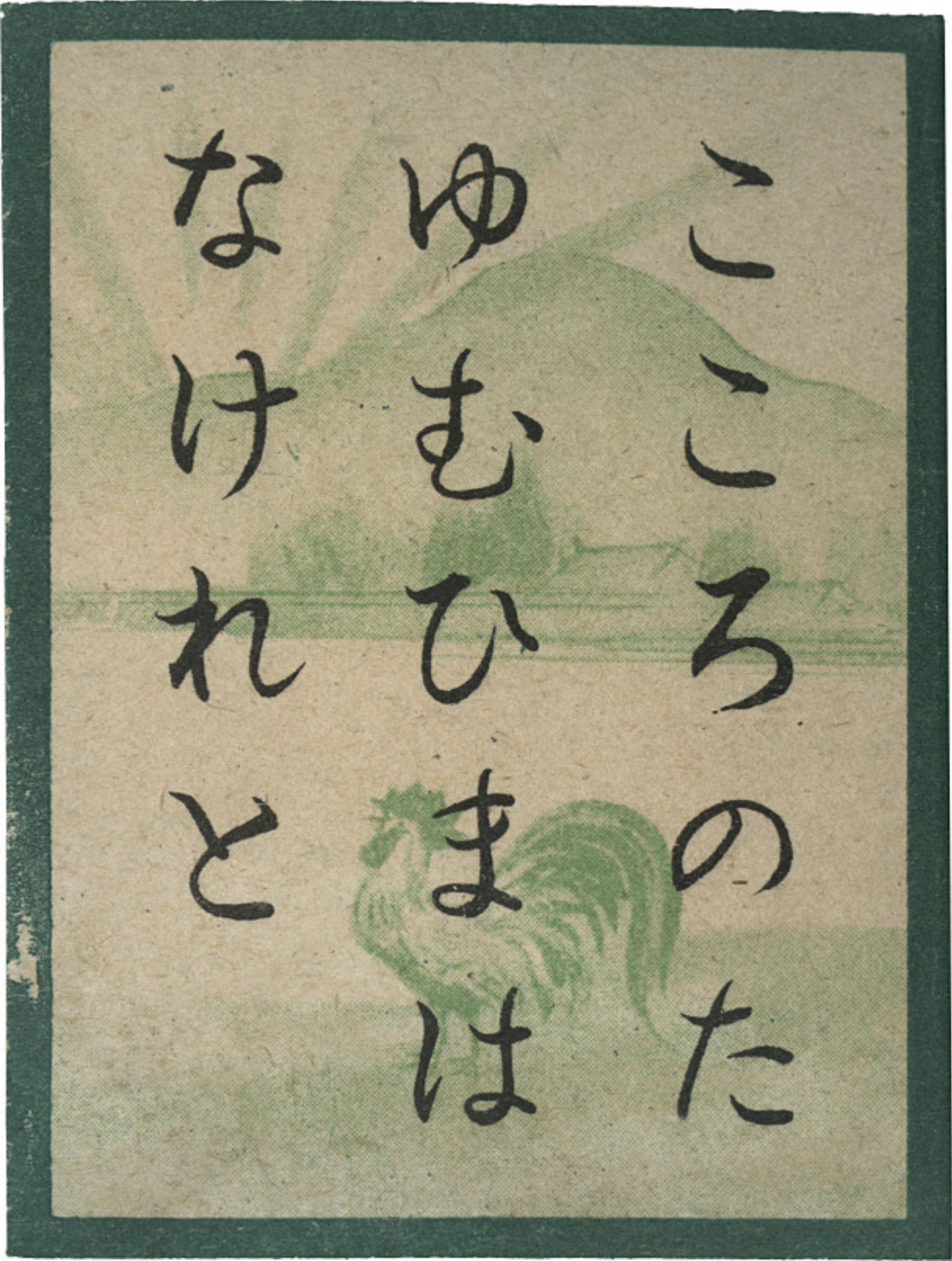
つもかよひ

てそすむ


こころにと
きてゆくは
このたひ

こころはつ
ねにたぬし
くありけり

あことの
ふるあまの
よひこゑ

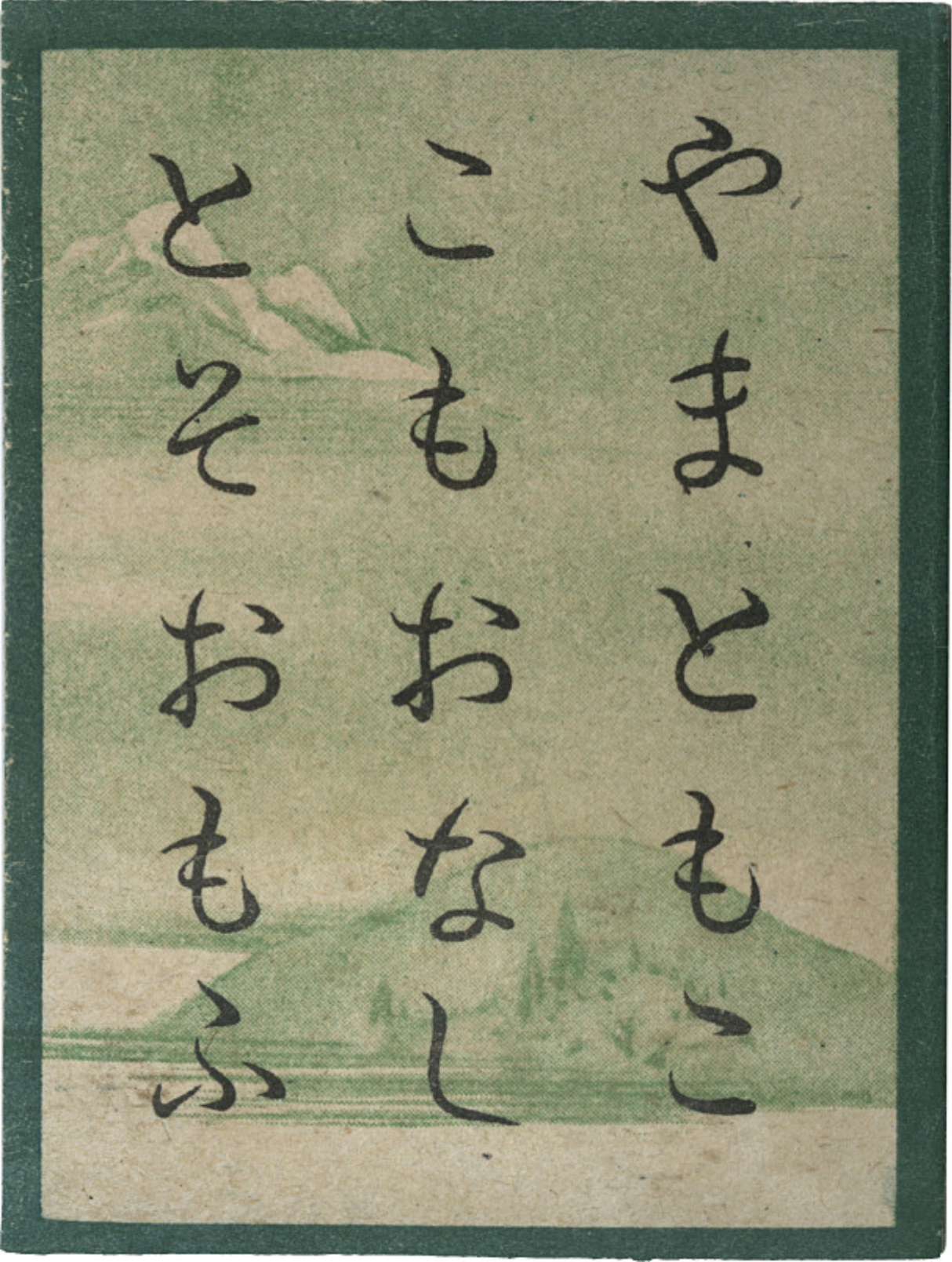

こころのたゆまはむひれけなと

くにのほみ
せてれる
つきかもも

くたけてか

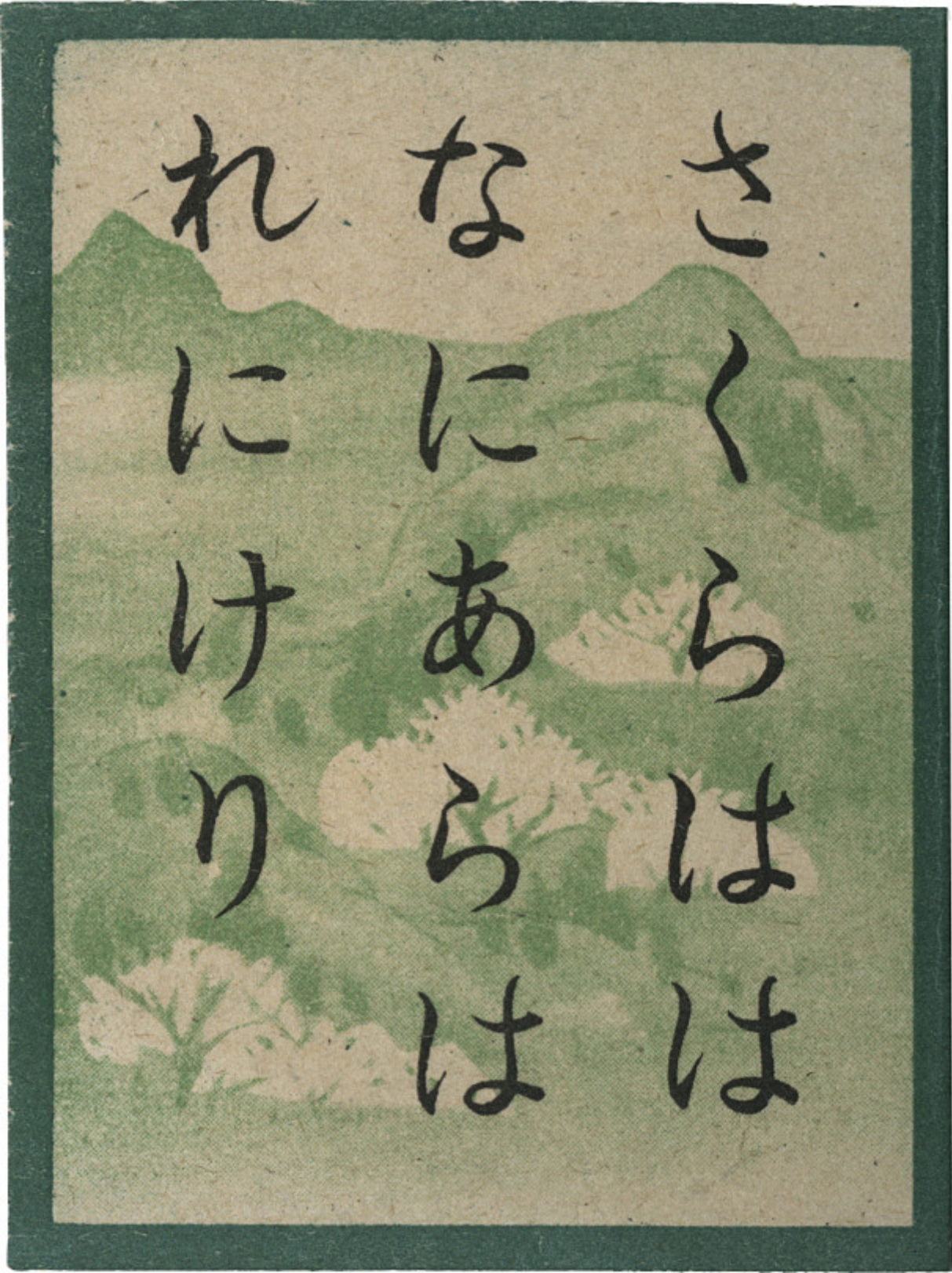
へれおきつ

しらなみ


やまともこ
こもおなし
とそおもふ

やまとしま
ねはいまさ
かゆなり

ますらたけ
をにみきた
てまつる


さくらはな
にあらはれ
にけり

さかゆるみ
よのこゑそ
きこゆる

さつまのせ

とにみはし

つむともも

きよきこころ

ろはつきそ

てらさむ

きみかちと

せのはつほ

にそつく

きみかやち
よをまつい
のるかな

きみかみた

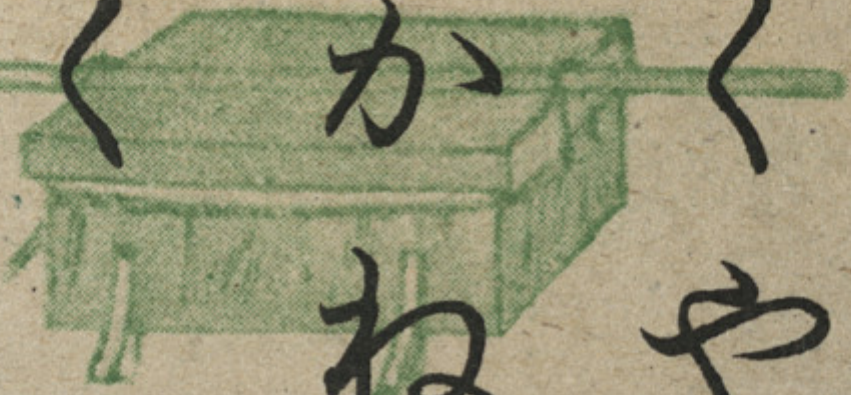
めにしなむ

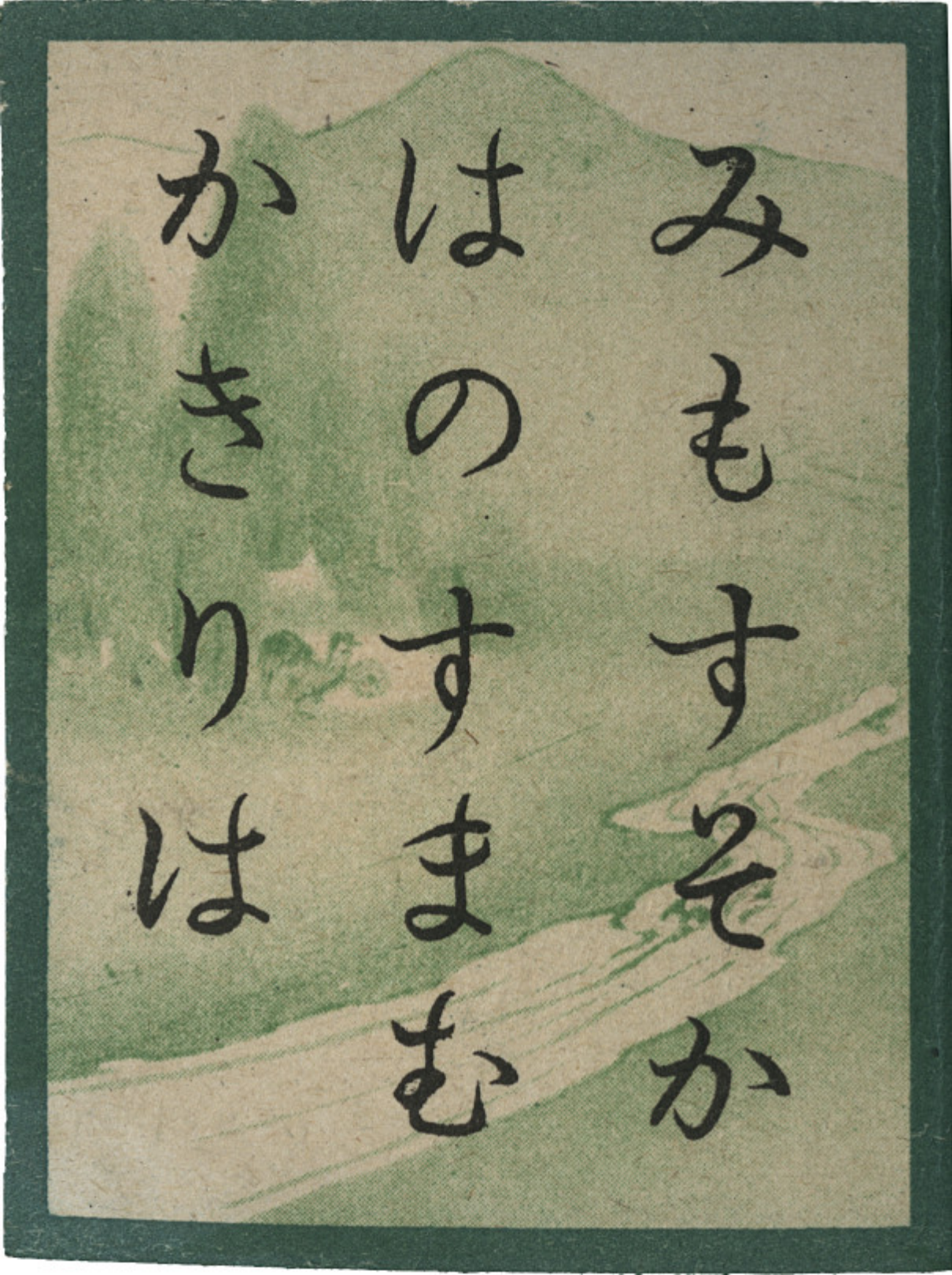
とそおもふ

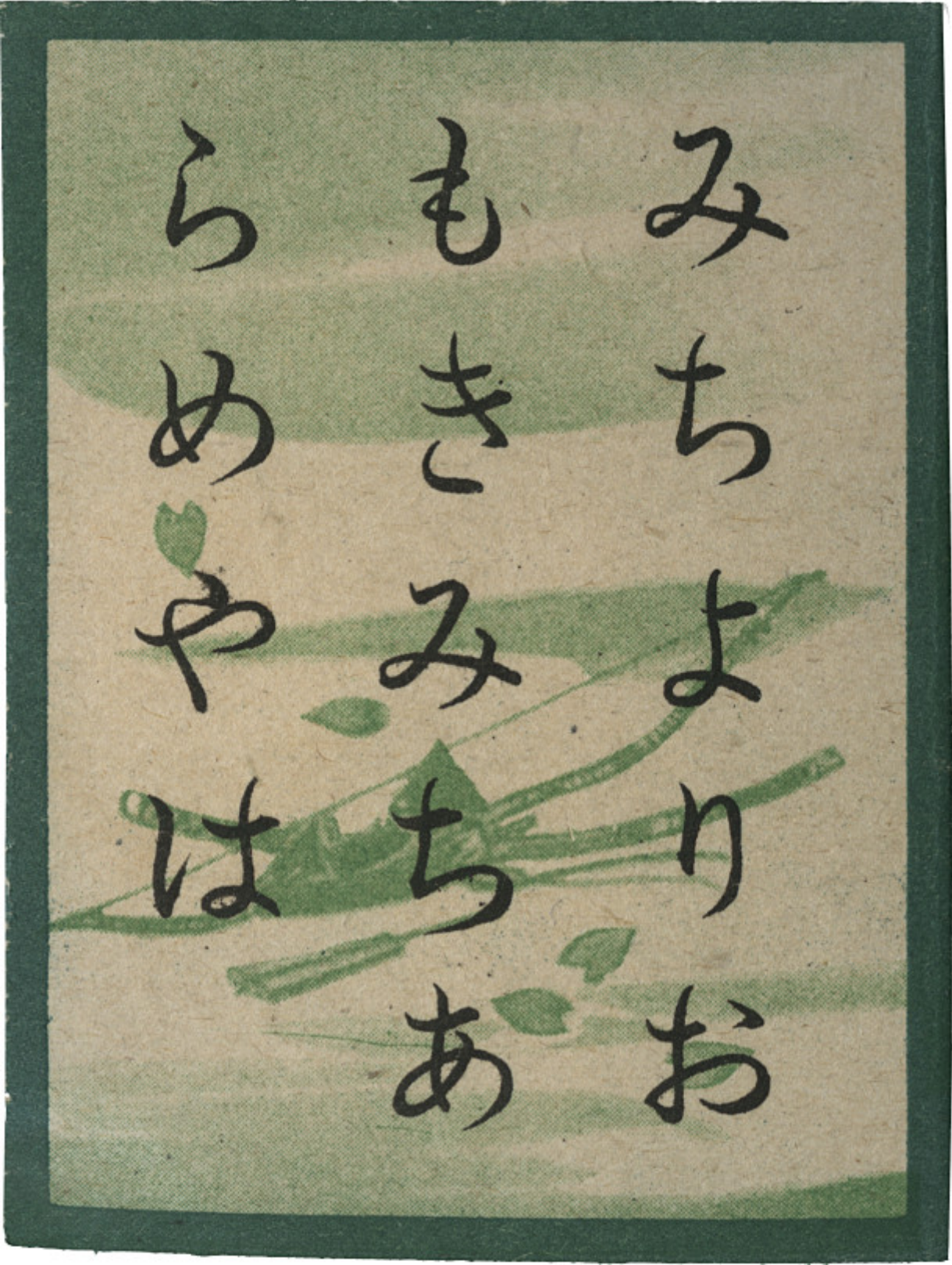
みちのくや

まにくかね

はなさくら



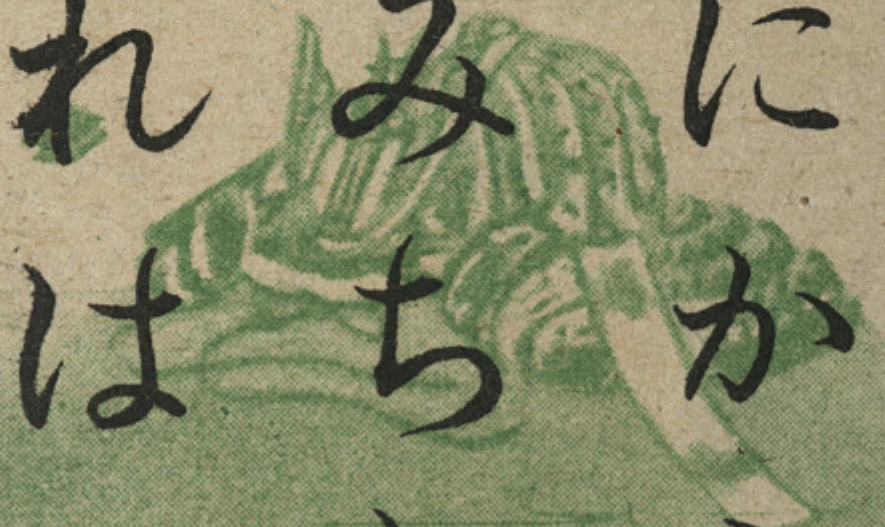

みもすそか
はのすまむ
かきりは


みちよりお
もきみちあ
らめやはち

みちにかふ

へきみちし

なけれはは



また いくほ
ともわかれ
さりけり

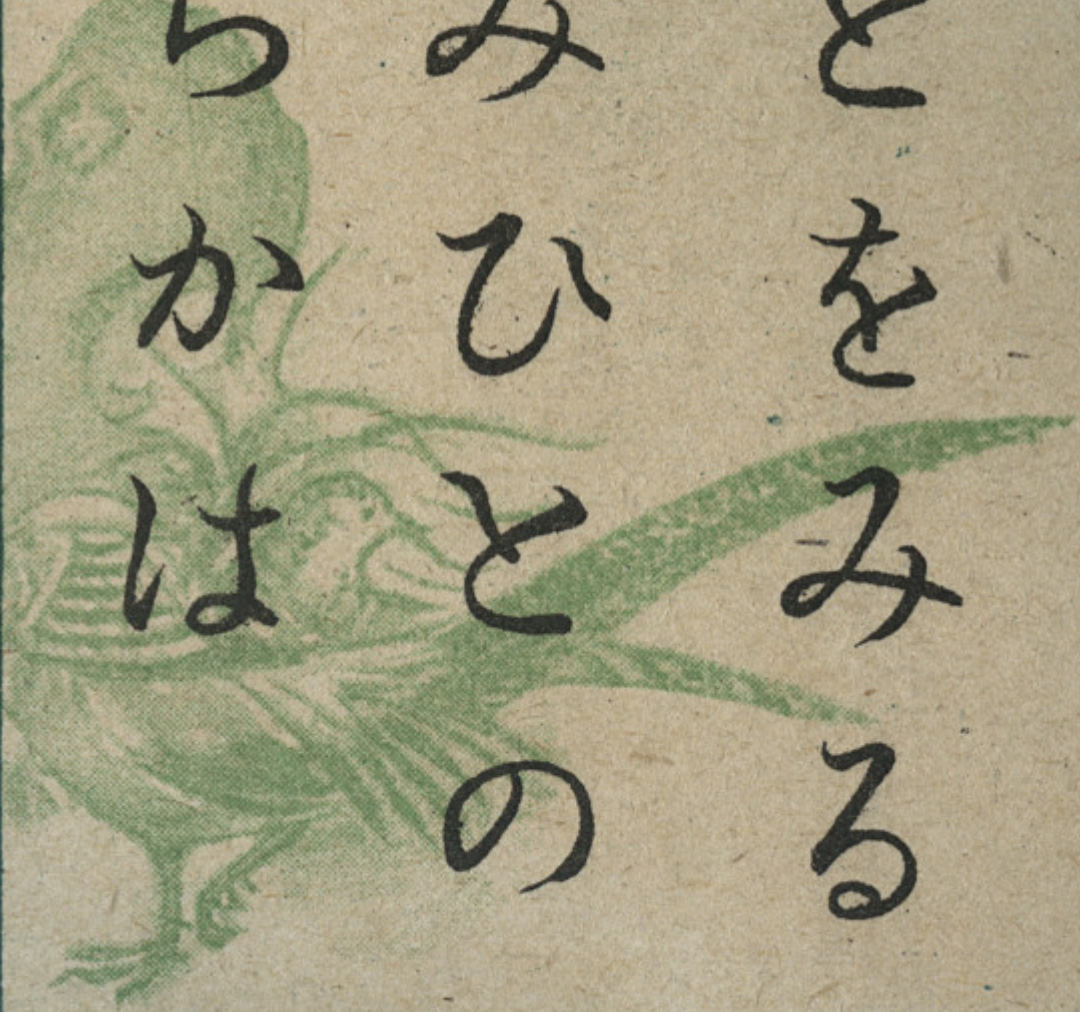
まもりのみ
ちはわれひ
とりみき

わかこはく

くめあめの

たつむら

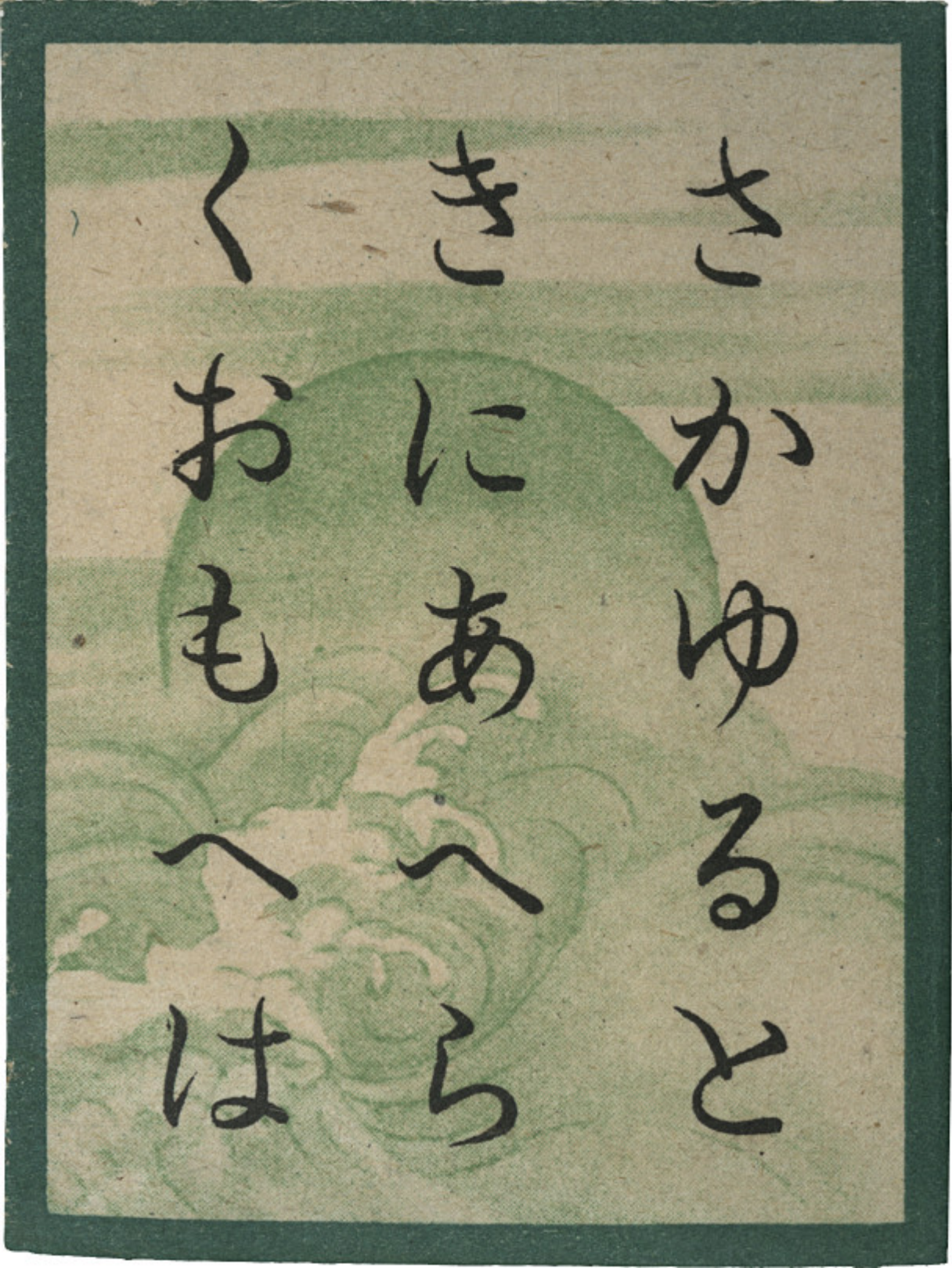
あとをみる
のみひとの
みちかはな



あさひに
ほふやまさ
くらはな

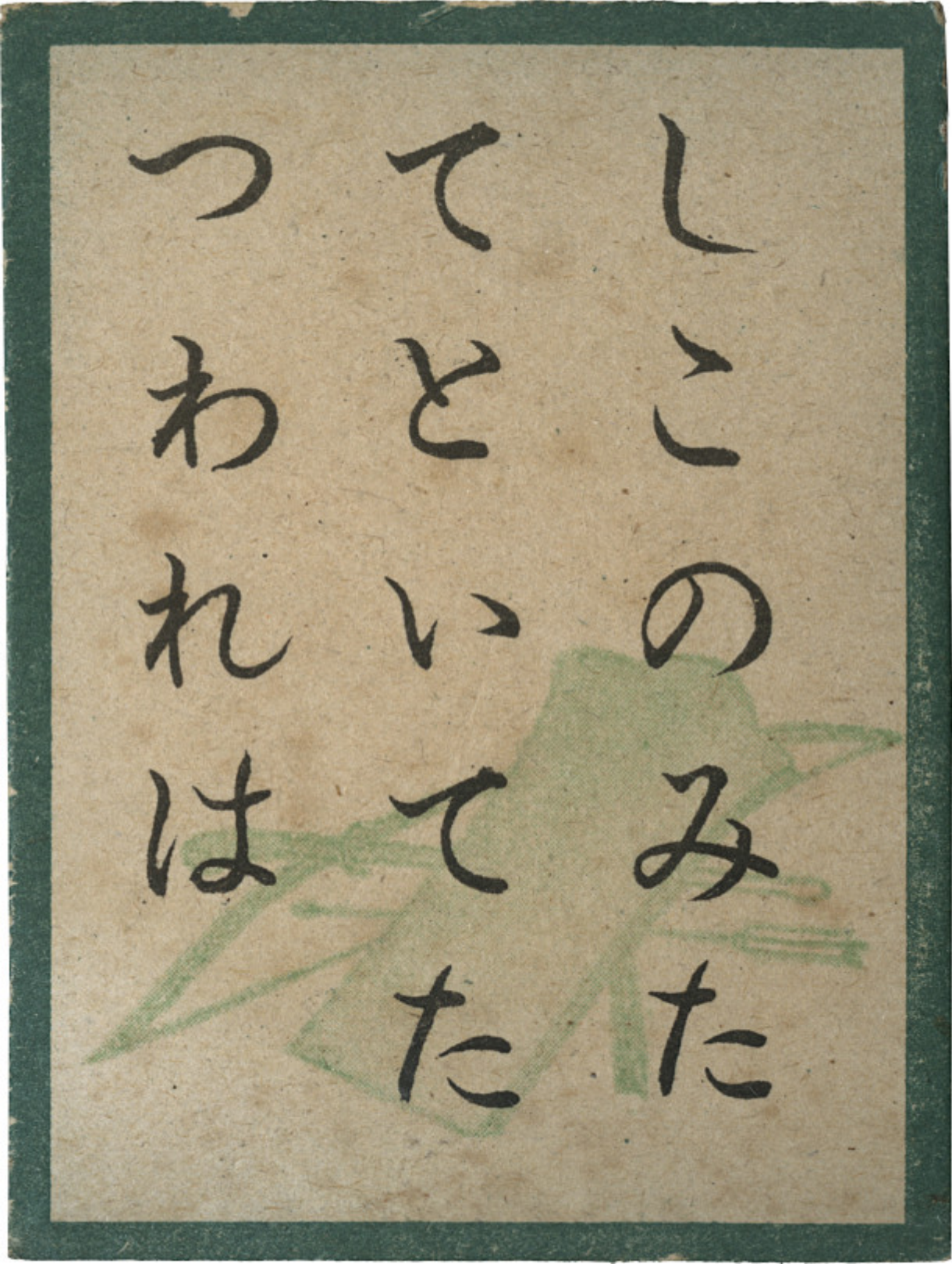
あすはかは
ねのうへに
てるやとも

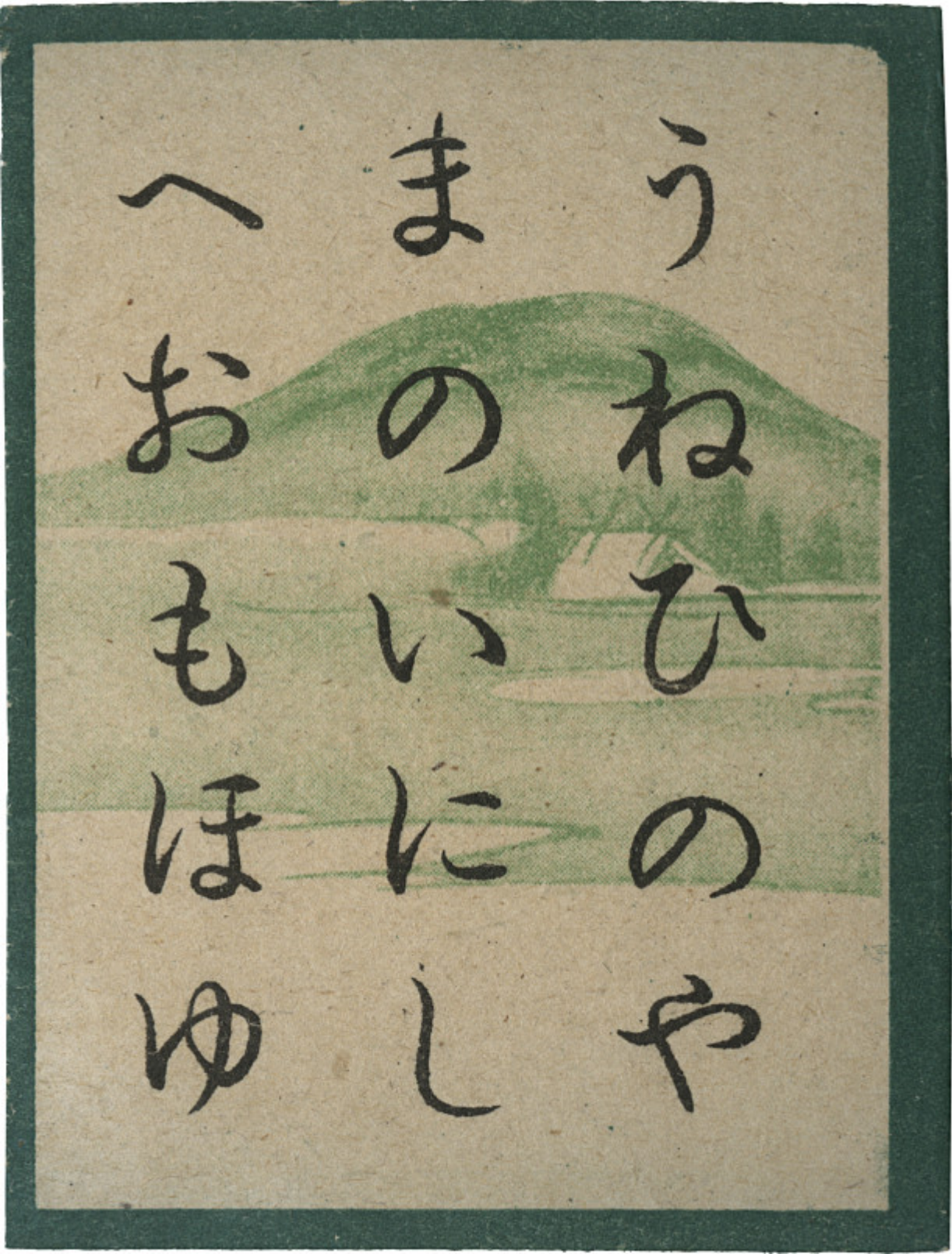
あふきこたふ
とめますら
をのとも


さかゆると
きにあへら
くおもへは

さつやたは
さみみたれ
たりみゆ

いはふいの
ちはおもち
ちかためぬ

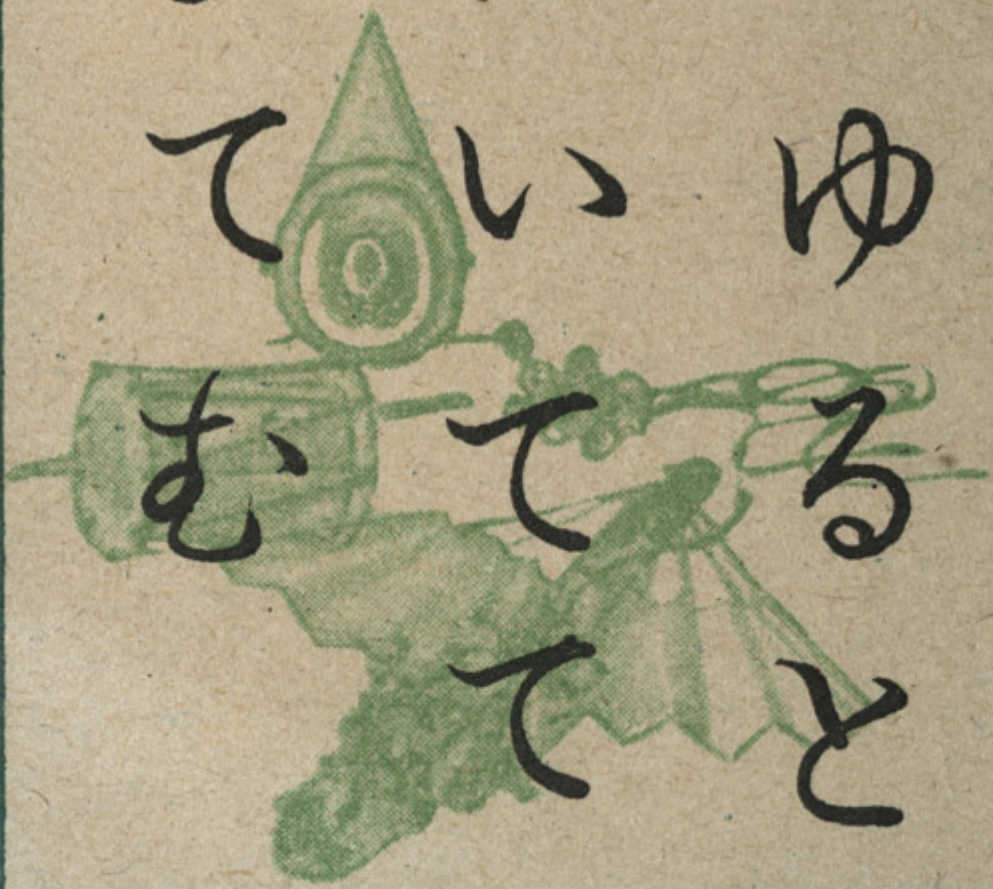

しこのみた
てといてた
つわれはて

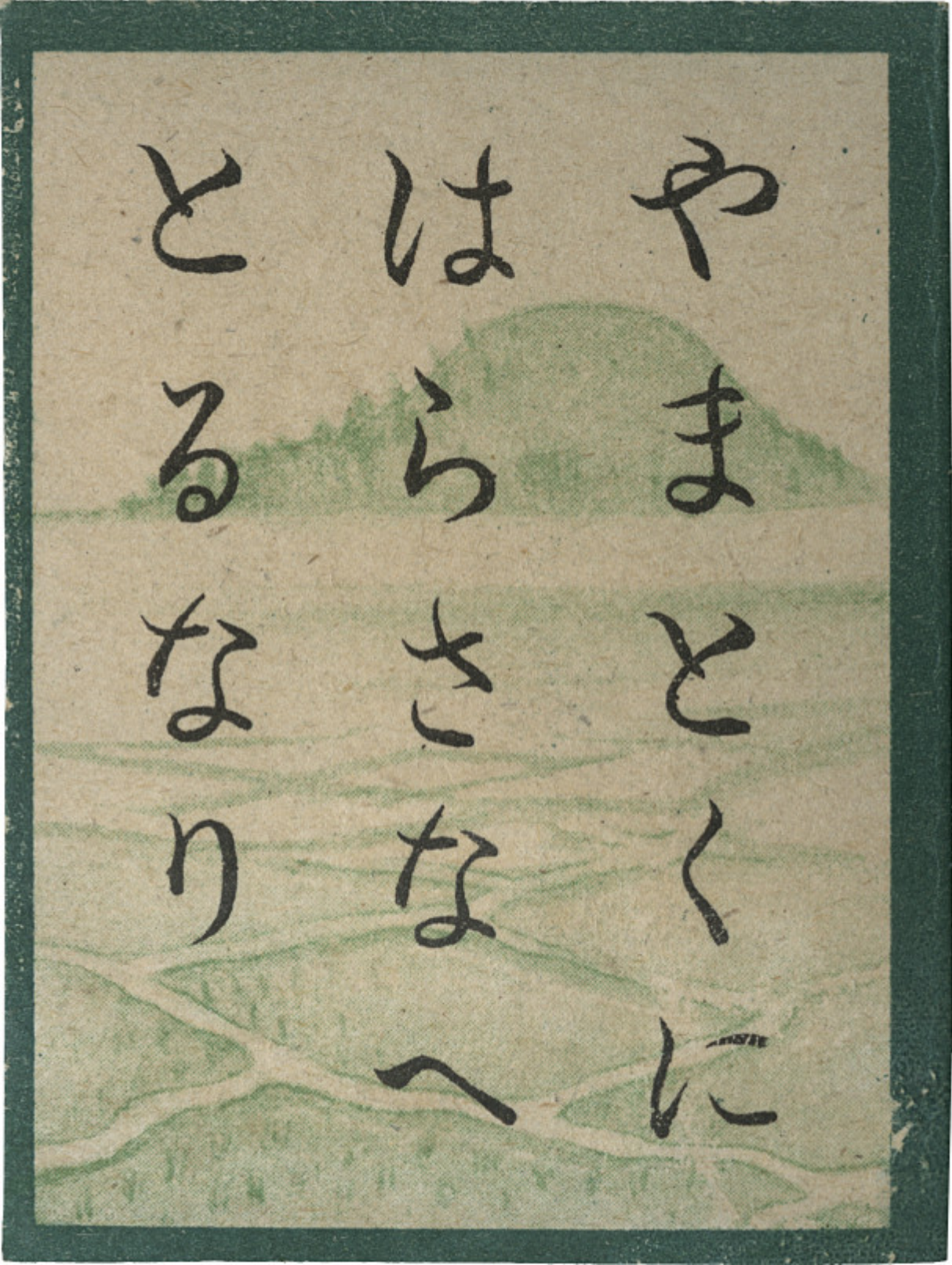

うまひの
まのにや
へおもほゆ

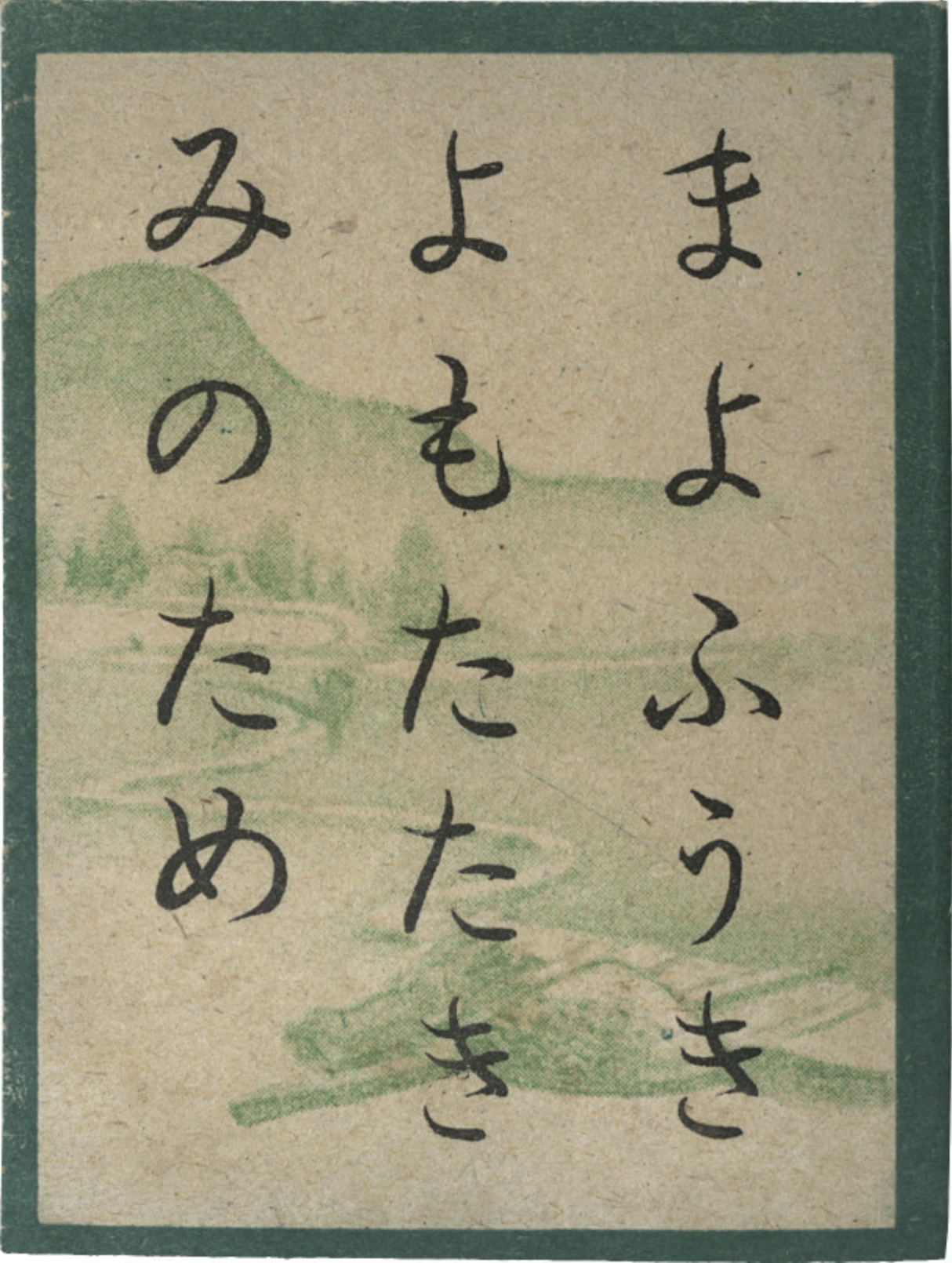
いかつちの
うへにいほ
りせるかも

いませはは
としおめか
はりせす

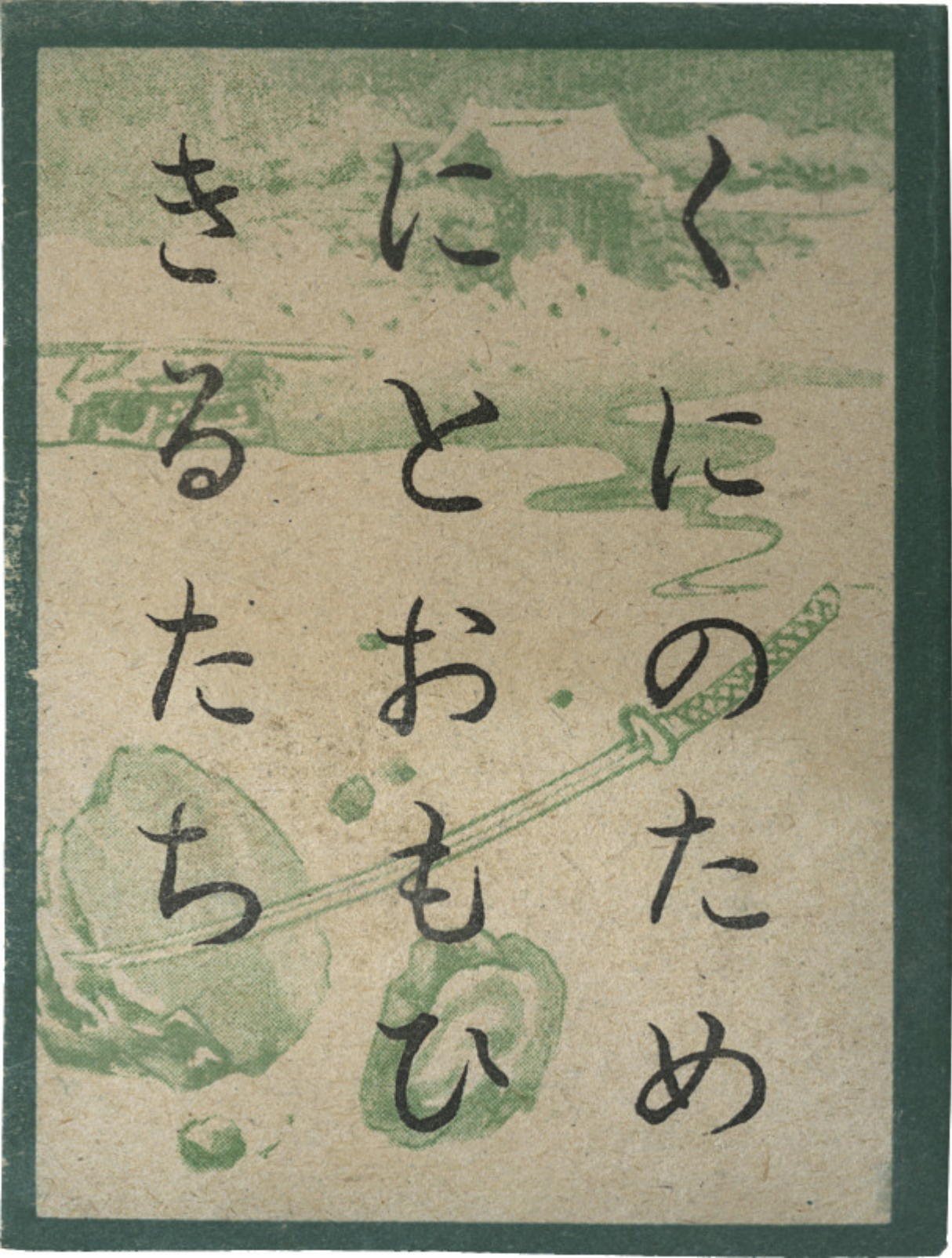
さかゆると
きにいてて
まひてむ




やまとくに
はらさなへ
とるなり


まよふうき
よもたたき
みのためめ

くにのために
とおもひ
きるたち



きみにふた
こころわか
あらめやも

いつるつき
ひのかきり
なけれは

いまもかみ
よのゆきは
のこれり

いのちあれ

はそをろか

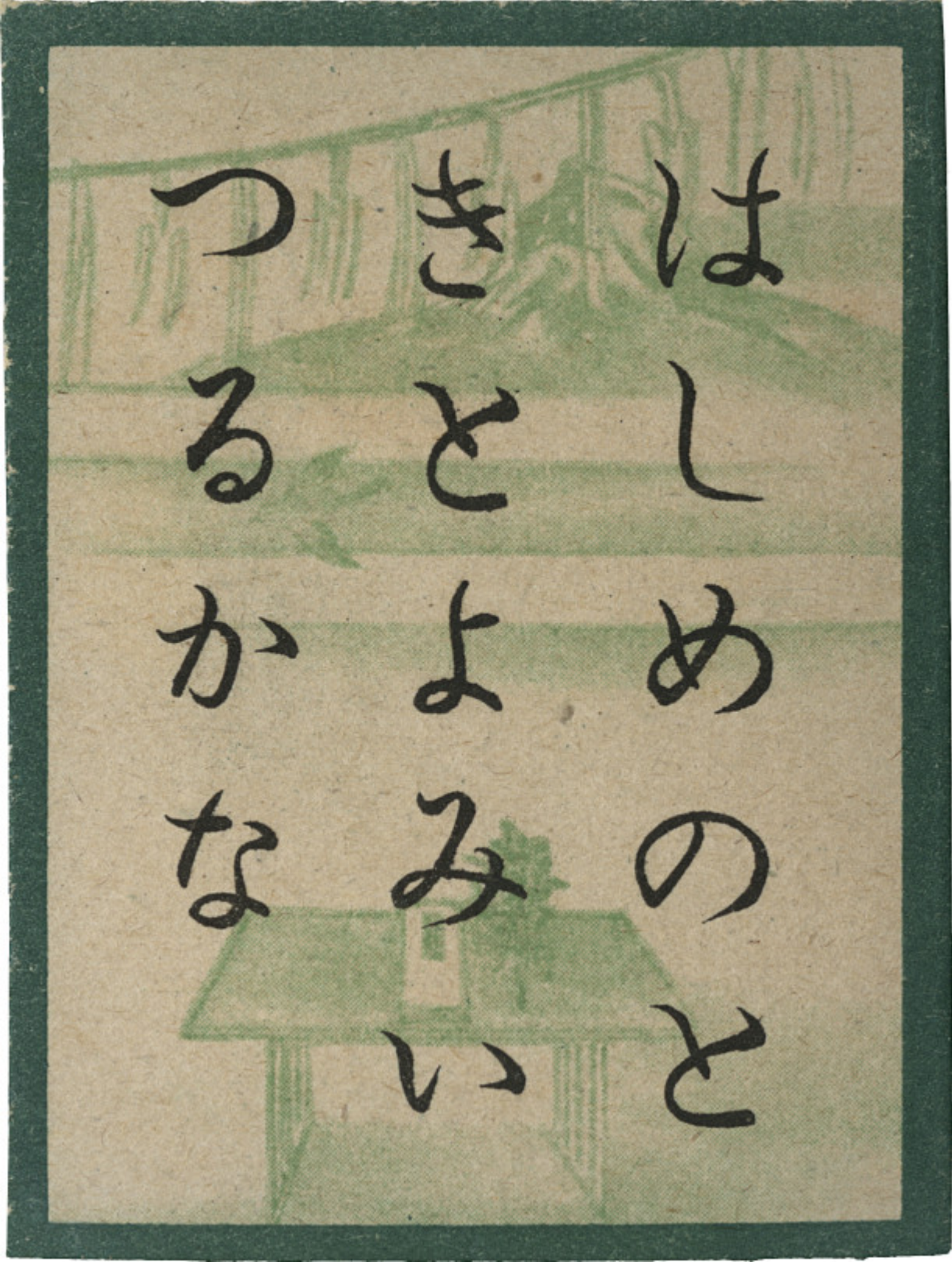
みにけり

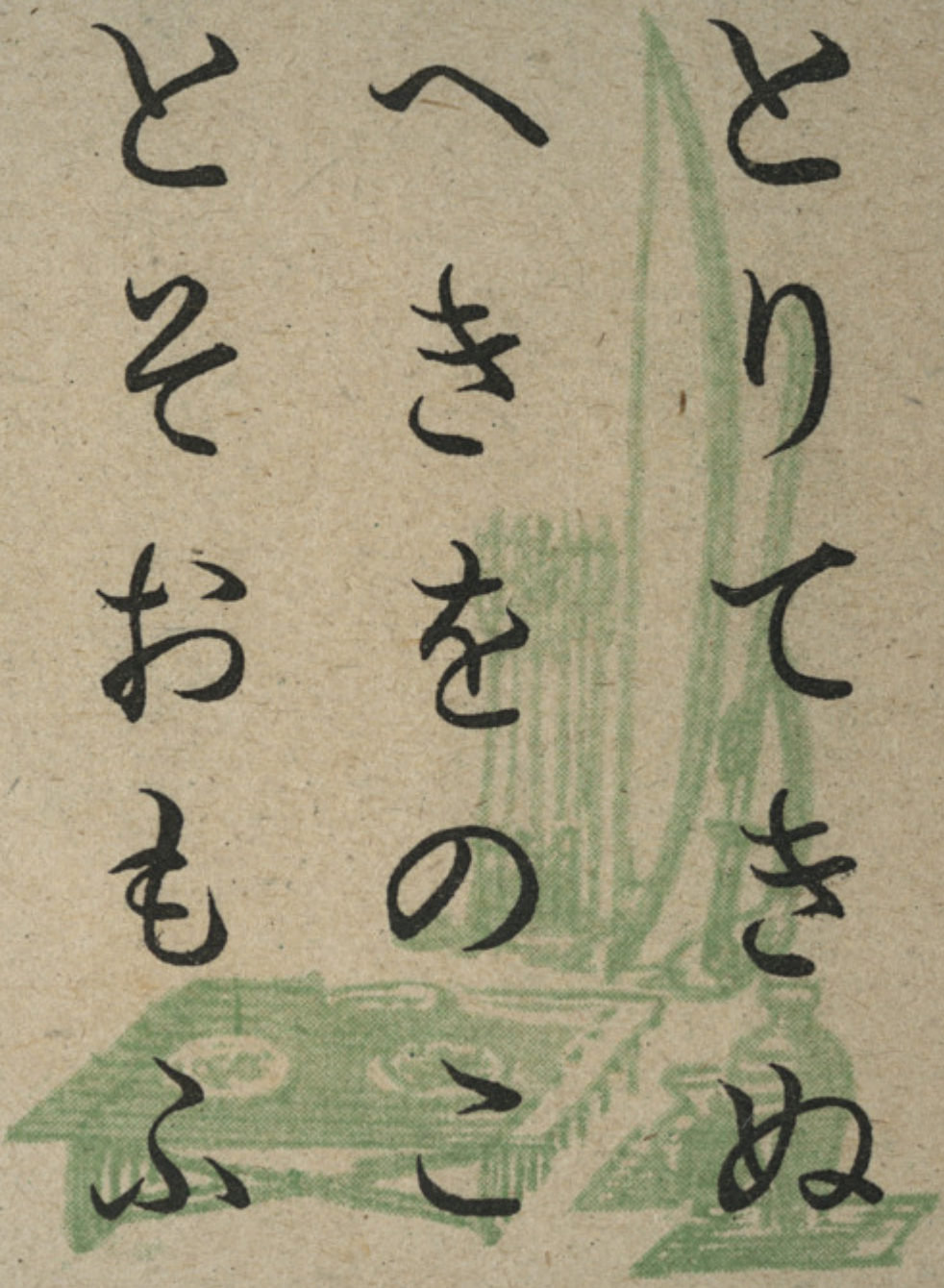
はなはいろ
にもいてに
けるかな

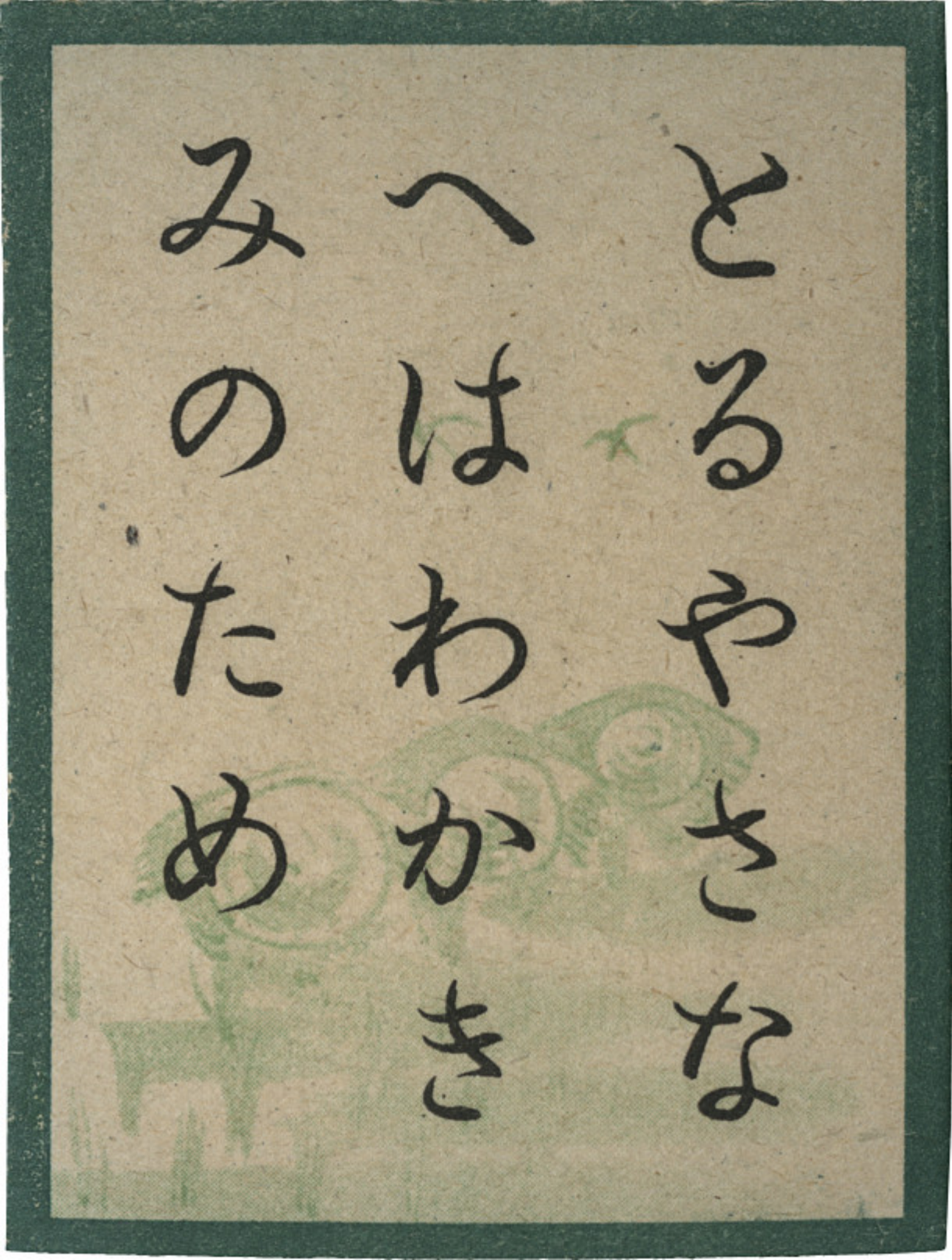
はやときつ

けてとりも

なくなり


はしめのと
きとよみい
つるかなな


とりてきぬ
へきをのこ
とそおもふ


とるやさな
へはわかき
みのためめ

とととめおか
ましやまと
たましひ

おもふこころはかみそしるらむ

おもひしこ
とはむかし
なりけり

おもかけう

かふききの

もみちは

ををしきみ
ちそたゆみ
あらすすな

おもへはかるきわかいのちかな

おもひそつ

もるこしの

しらゆき

わかたらち

ねそたふと

かりけるる

わかみありともおもはさりけりけり

わかとしつ

きのやまと

たましひ

かたりつく

へきなはた

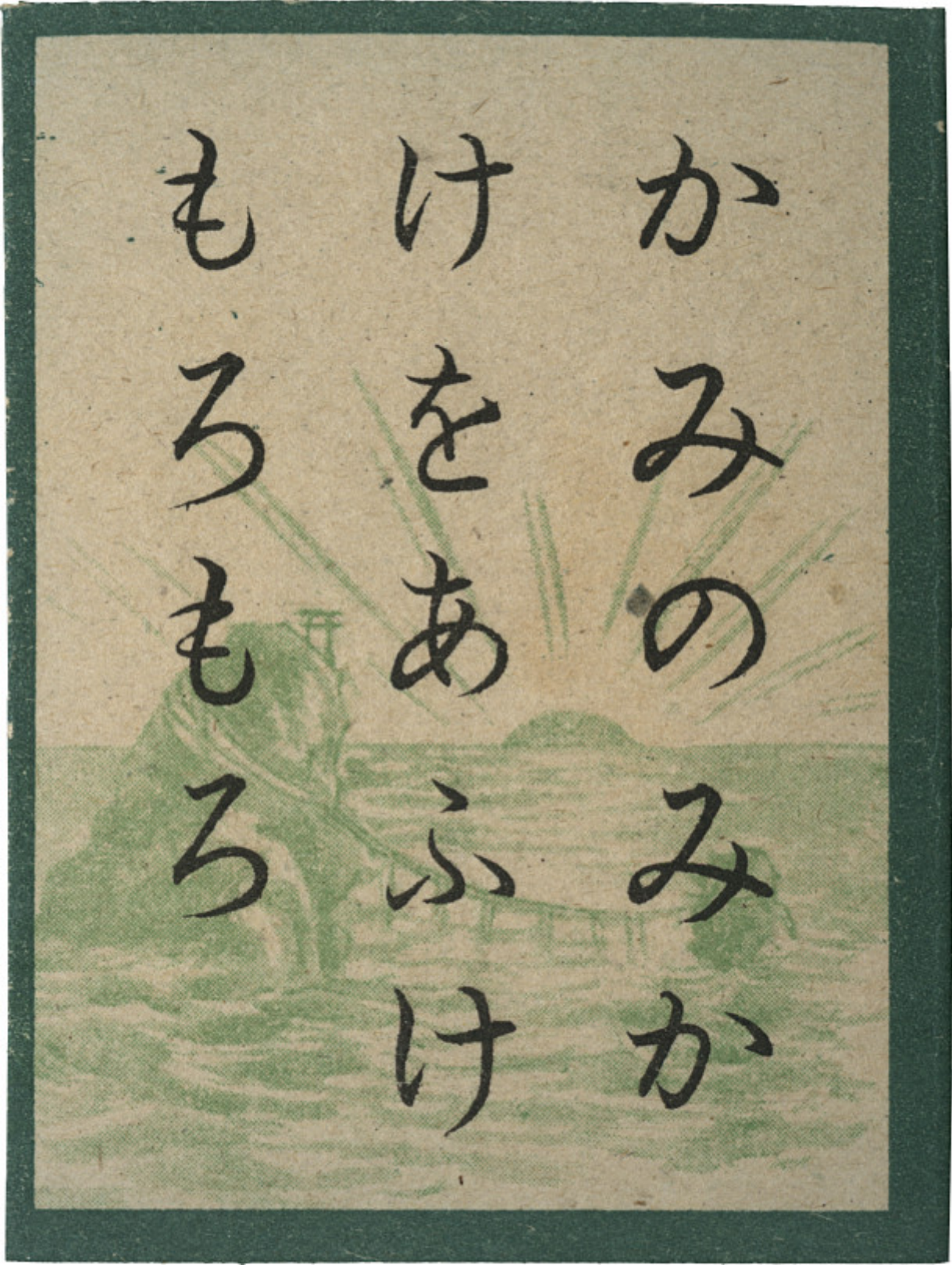
てすして

かみのまも

れるやまと

しまねそ

かかやくくにのてふりみせはやや


かみのみか
けをあふけ
もろもろ

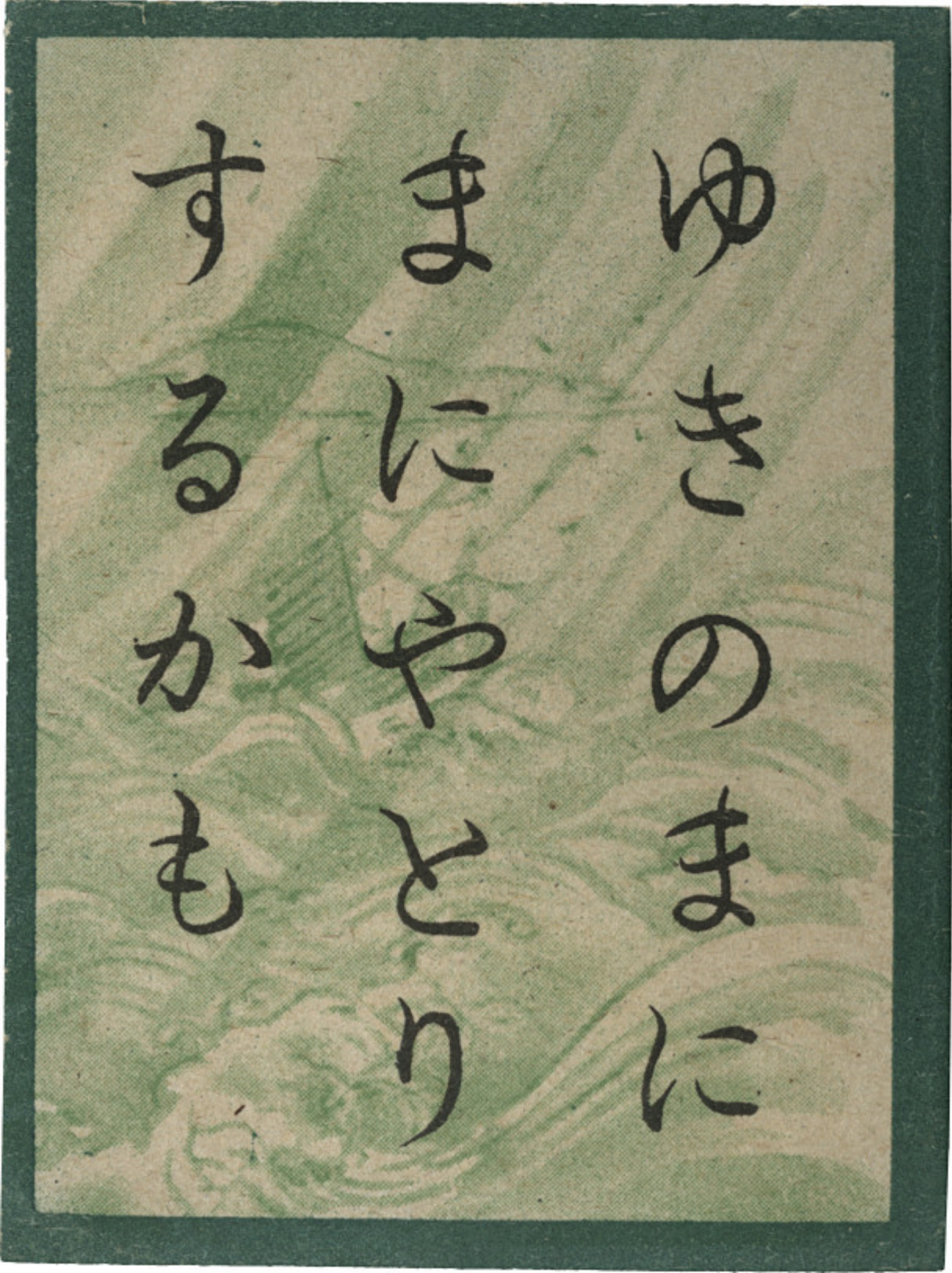
かみのみた

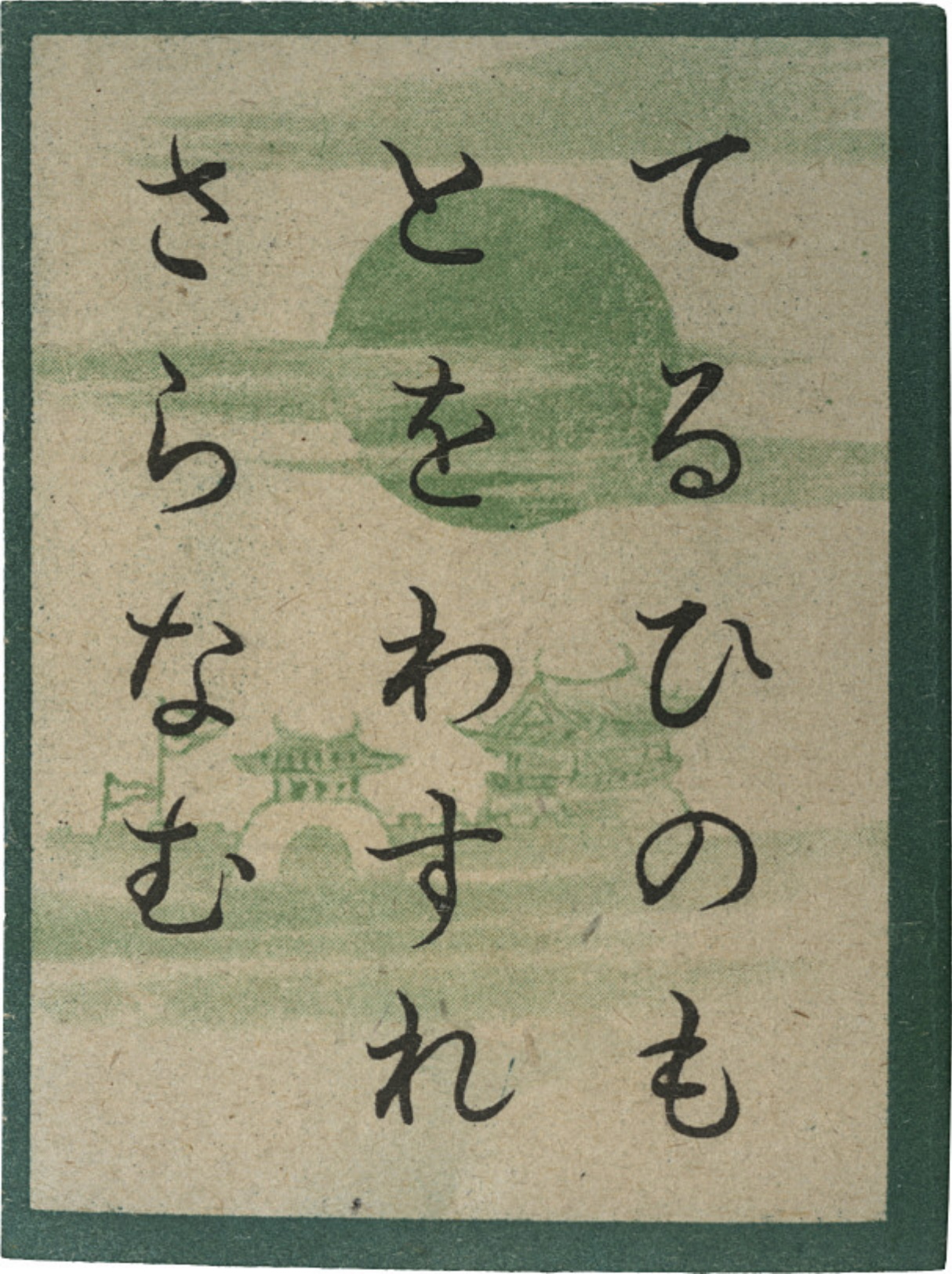
みとあるか

たぬしさ

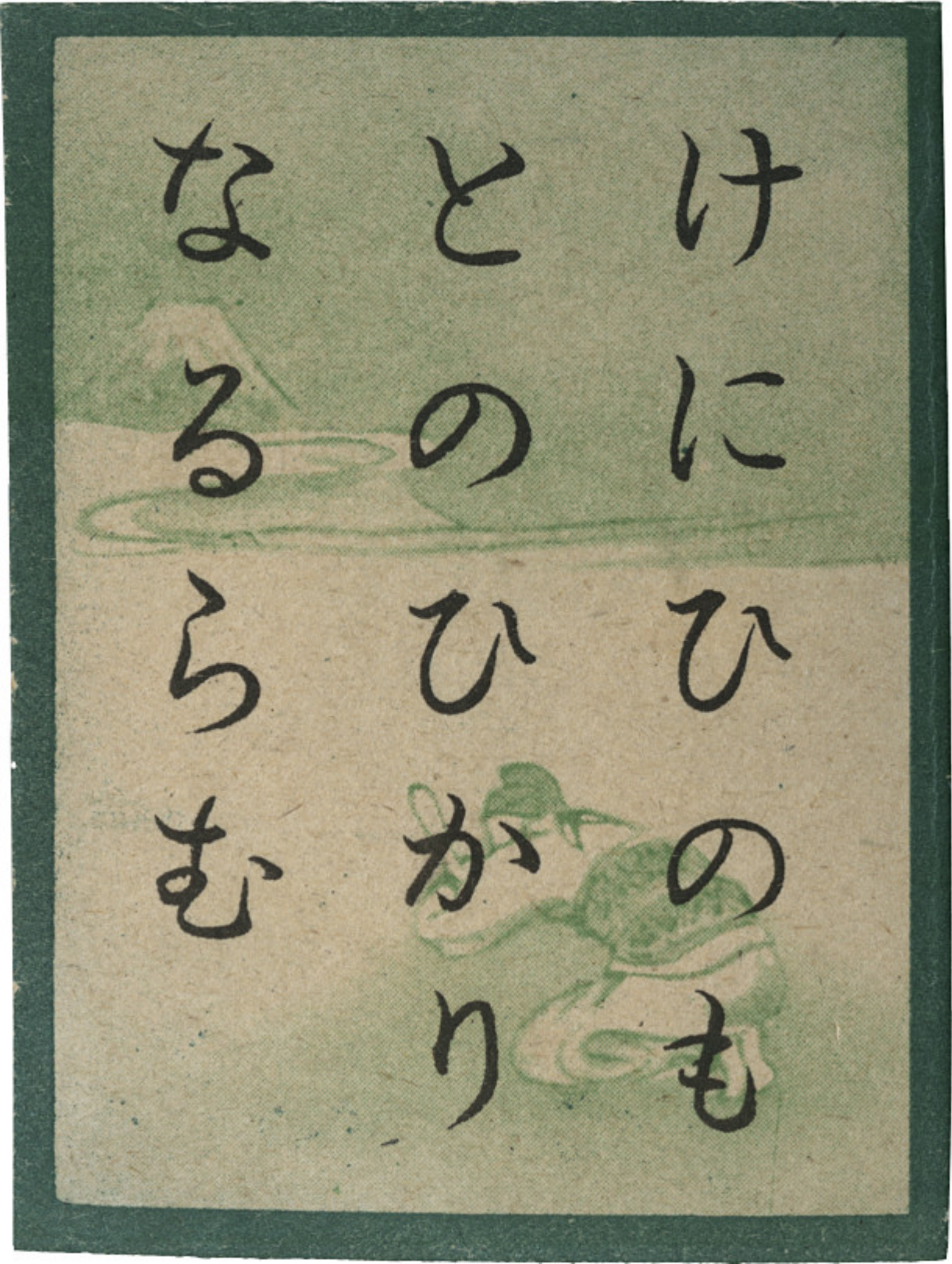
かせふくと
きそみたれ
さりける

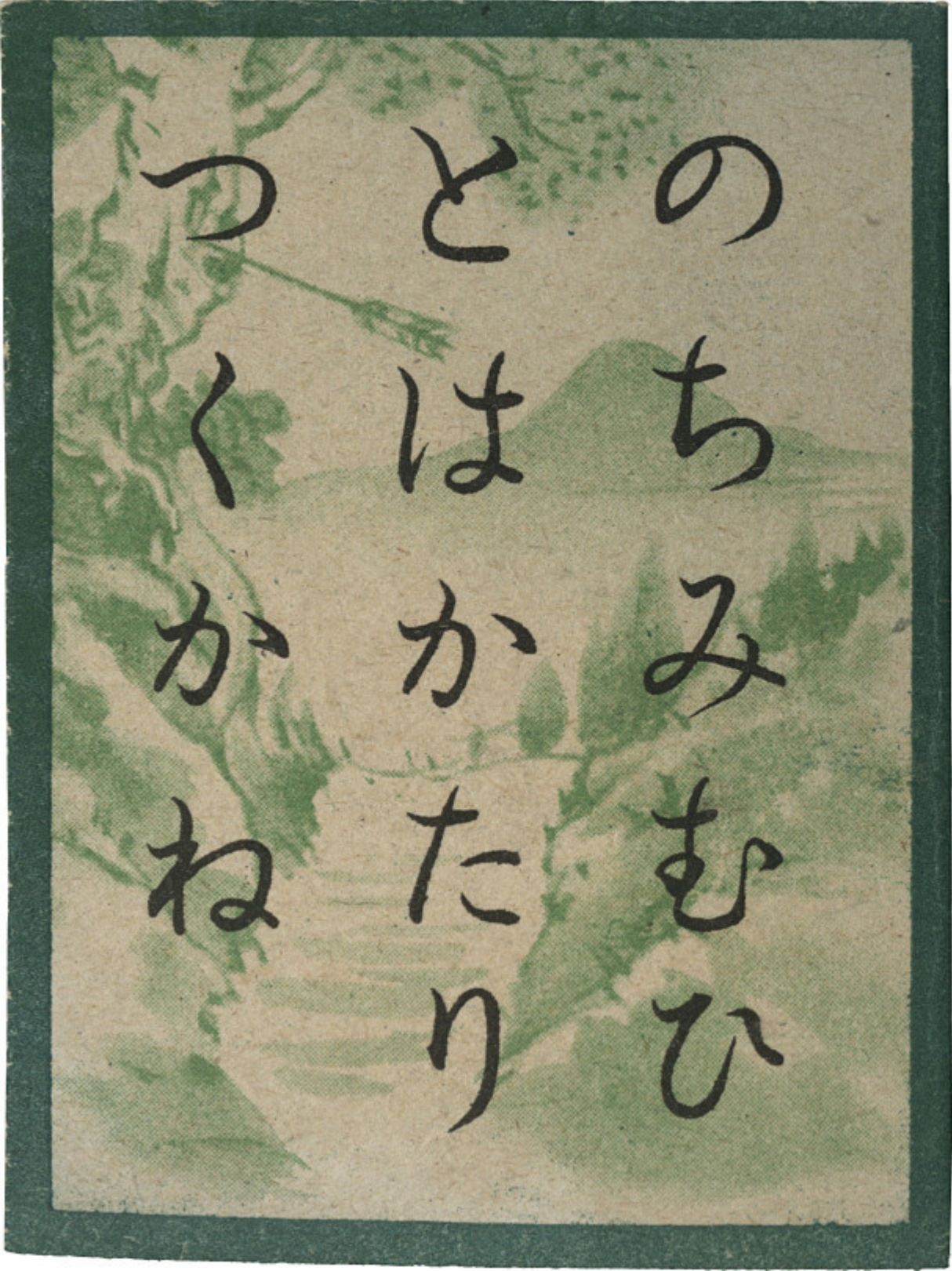
しるすとな
らしゆきの
ふれるはは

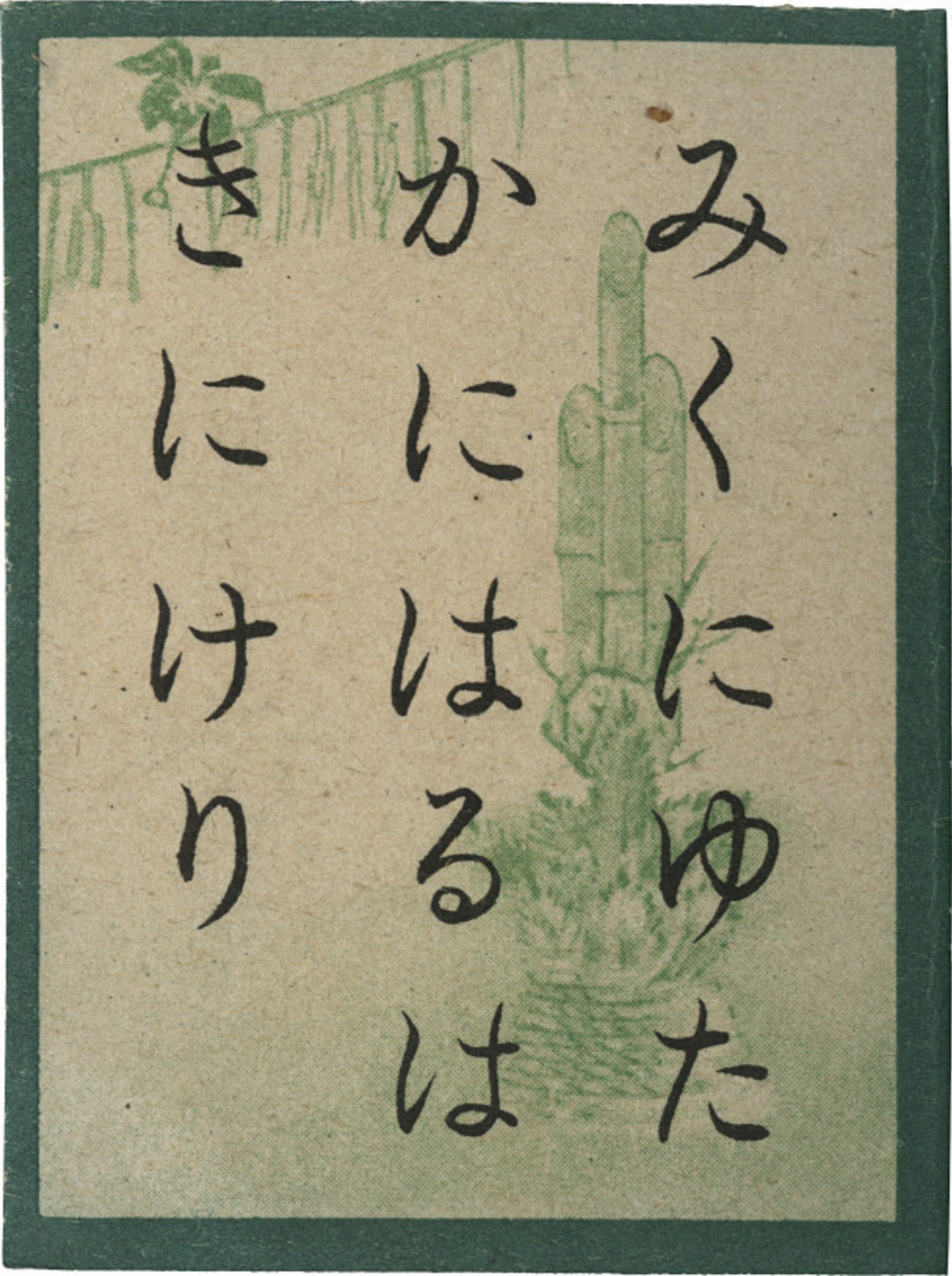

ゆきのまに
まにやとり
するかもも


てるひのも
とをわすれ
さらなむ

ふねよりと
ほくものを
こそおもへ


けにひのも
とのひかり
なるらむ


のちみむひ
とはかたり
つくかねね



みくにゆ
かにはる
きにけり

みせはやと

おもふみよ

のはるかな

みいつかか

やくみよに

なしてむ

ひにもみつ
にもわれな
けなくに

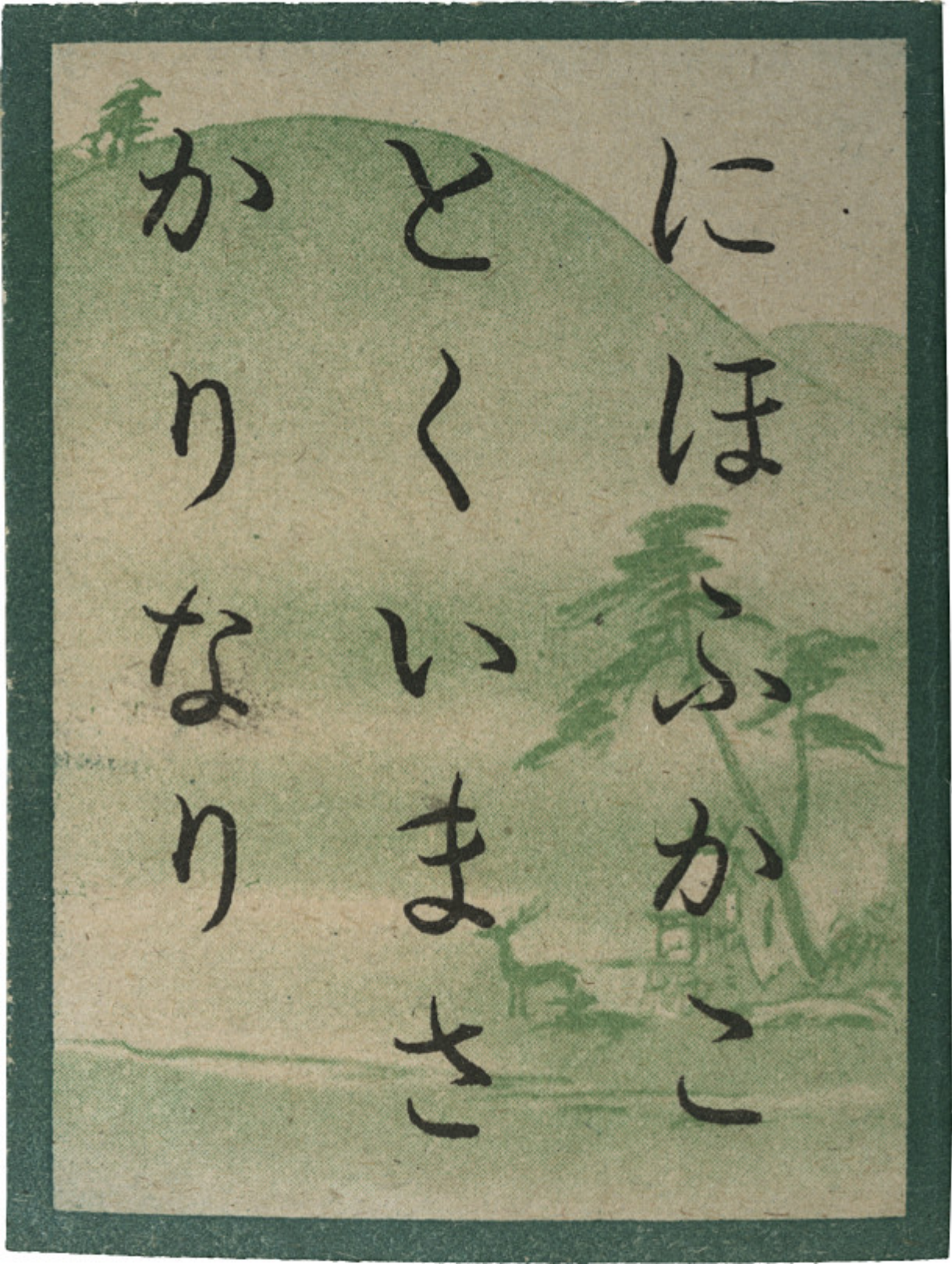
ひかりをみ

れはたふと

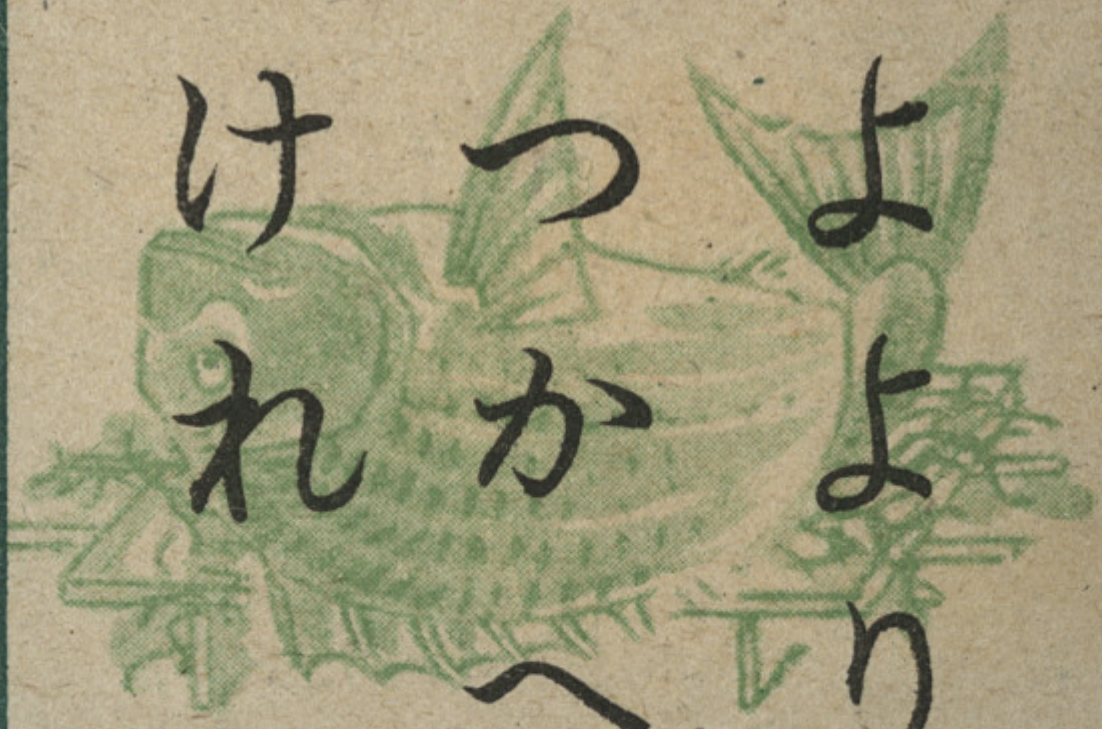
くもあるか

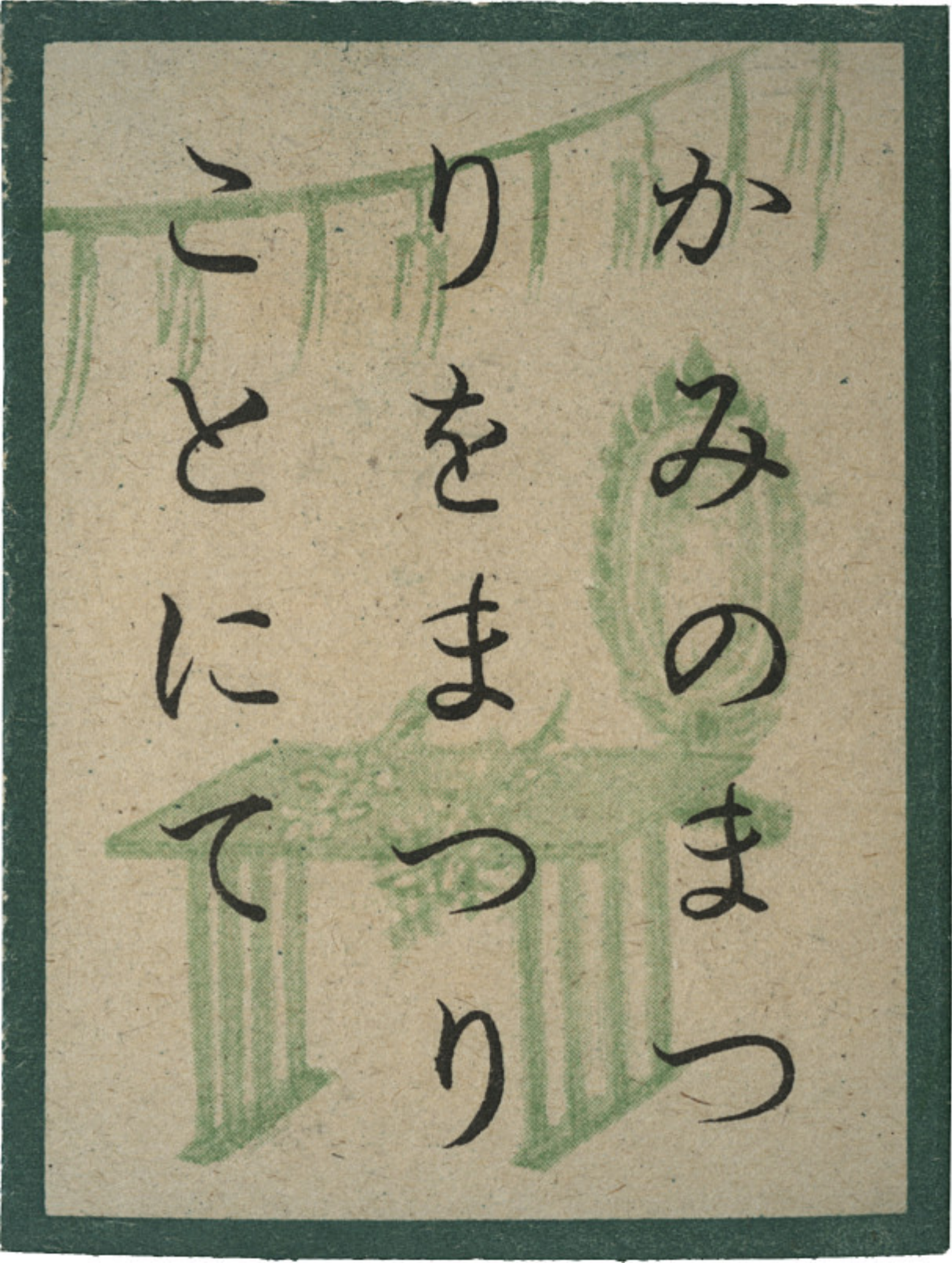
ひととうま
れしかひは
ありけれ

ちかひしこと
をわれわす
れめやも


にほんかこ
とくいまさ
かりなり

かみよりも
こそつかへ
きにけれ




かみのまつり
をまつりことにて

すめらみく
さにわれは
きにしを

かたりつき

てよみねの

まつかせ

よしのをはるのやまとなしけむ

よろつのく
にすくれ
たるくに

よせくるなみはかつくたけつつ

かへるたび
ちのいきと
ほろしも

つかへまつれはたふとくもあるか

つくしのしてはいくわれをさま

たたひとす
ちのおほつ
なにせよ

たまのみこ
ゑのかかる
うれしさ

うのはらわ
たるちちは
はをおきて

たかちほの
たけやまつ
かすむらむ

つもりてよ
ものうみと
なるまて

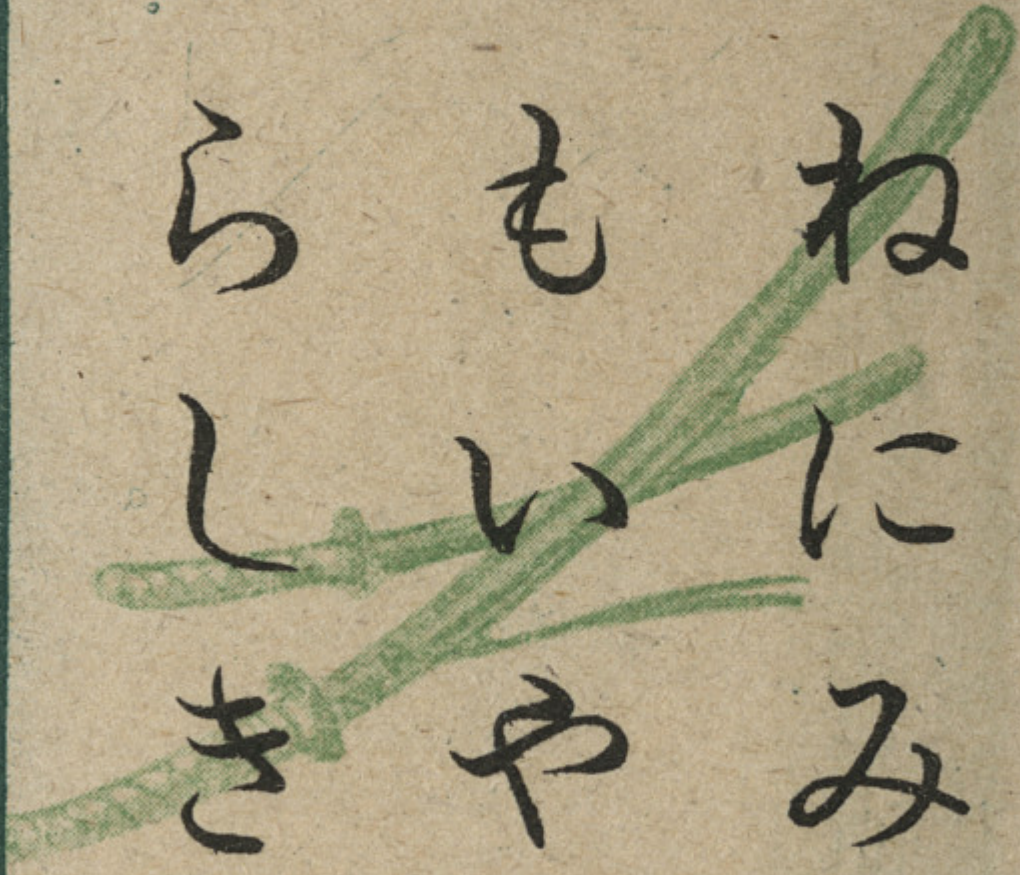
つゆもくも
らぬひのみ
かけかな

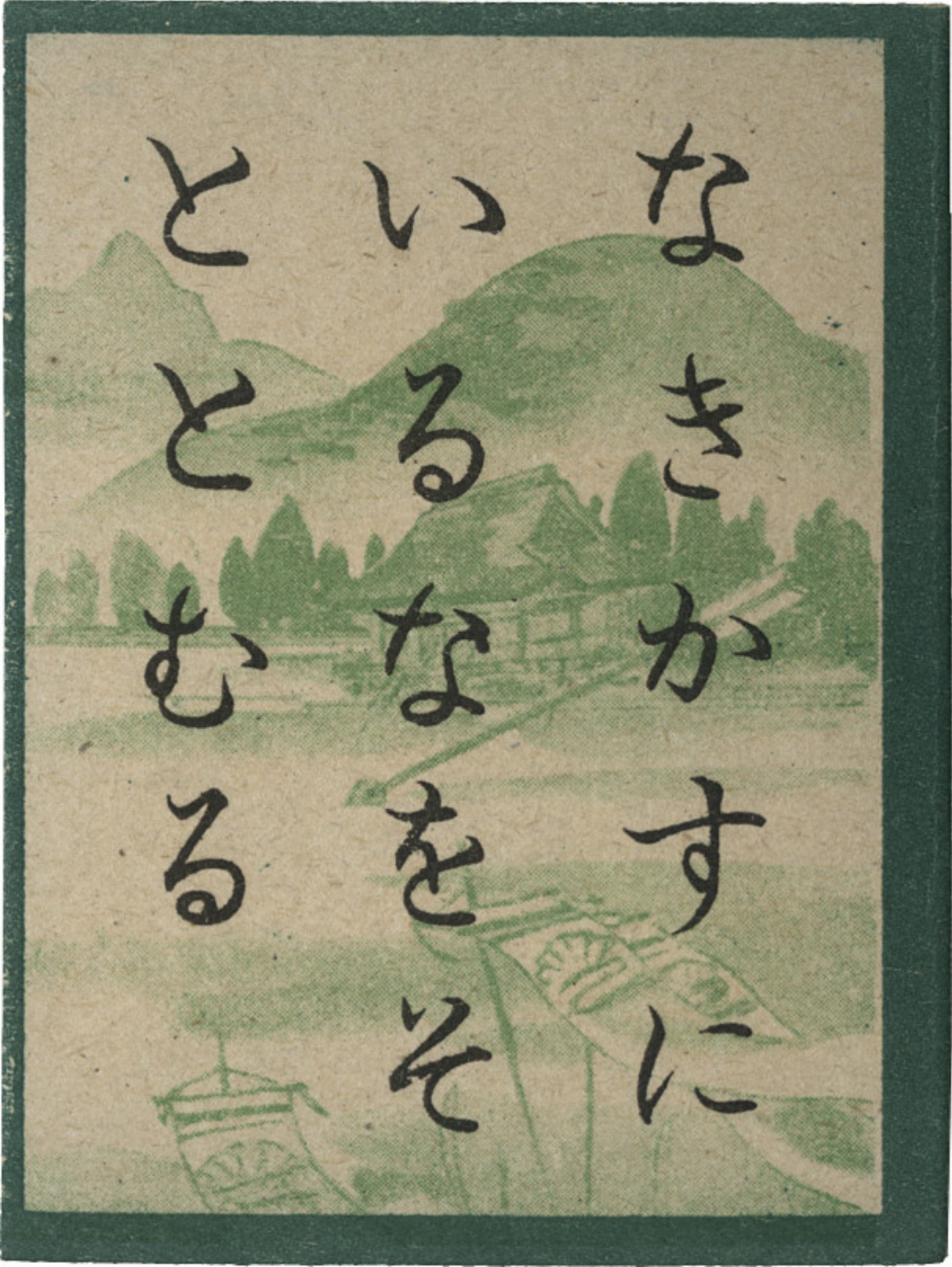
つきてひろ
めよこのま
さみちを

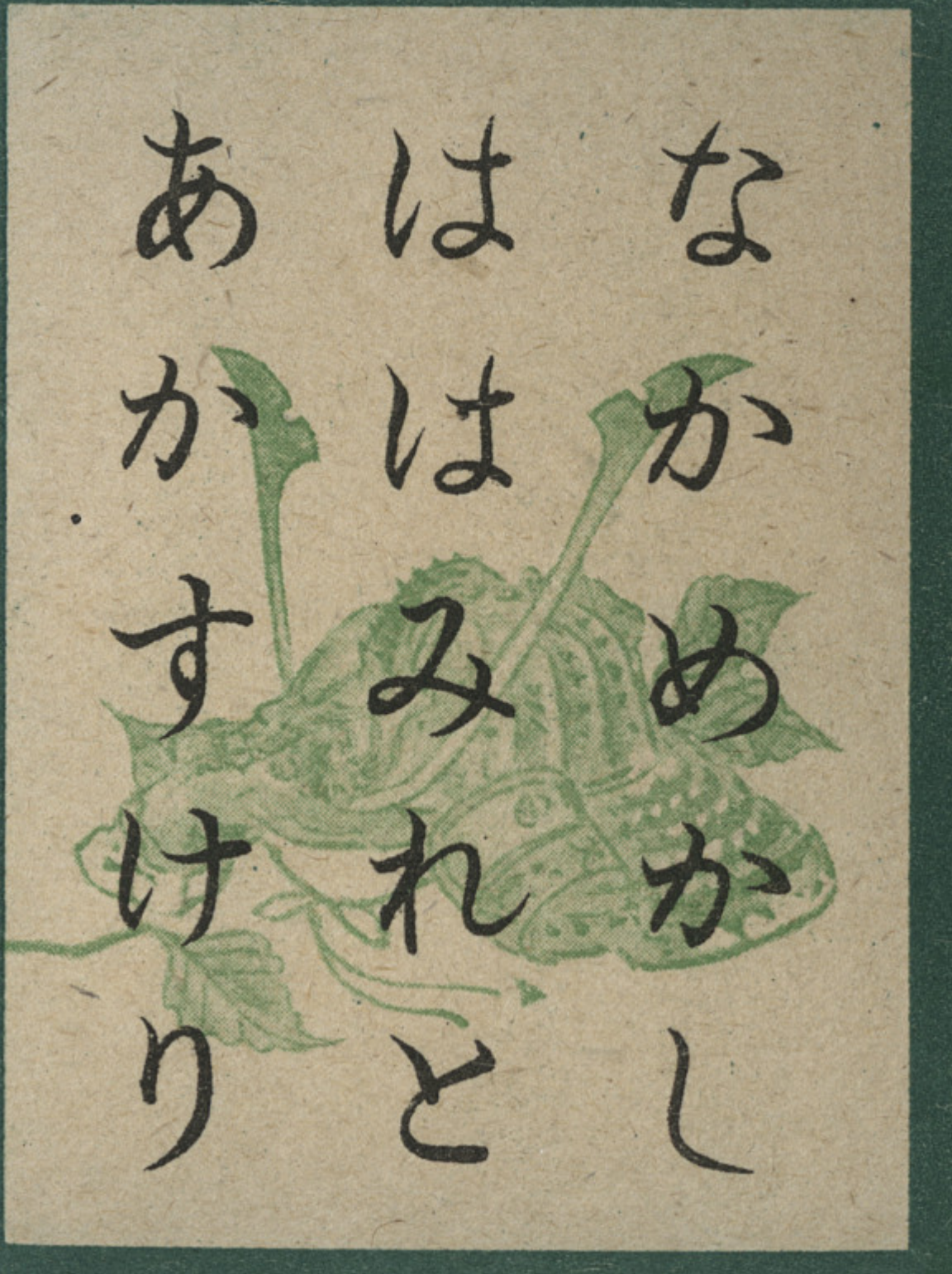
つねにみれ

ともいやめ

つらしきき




なきすに
いるなをそ
とむる

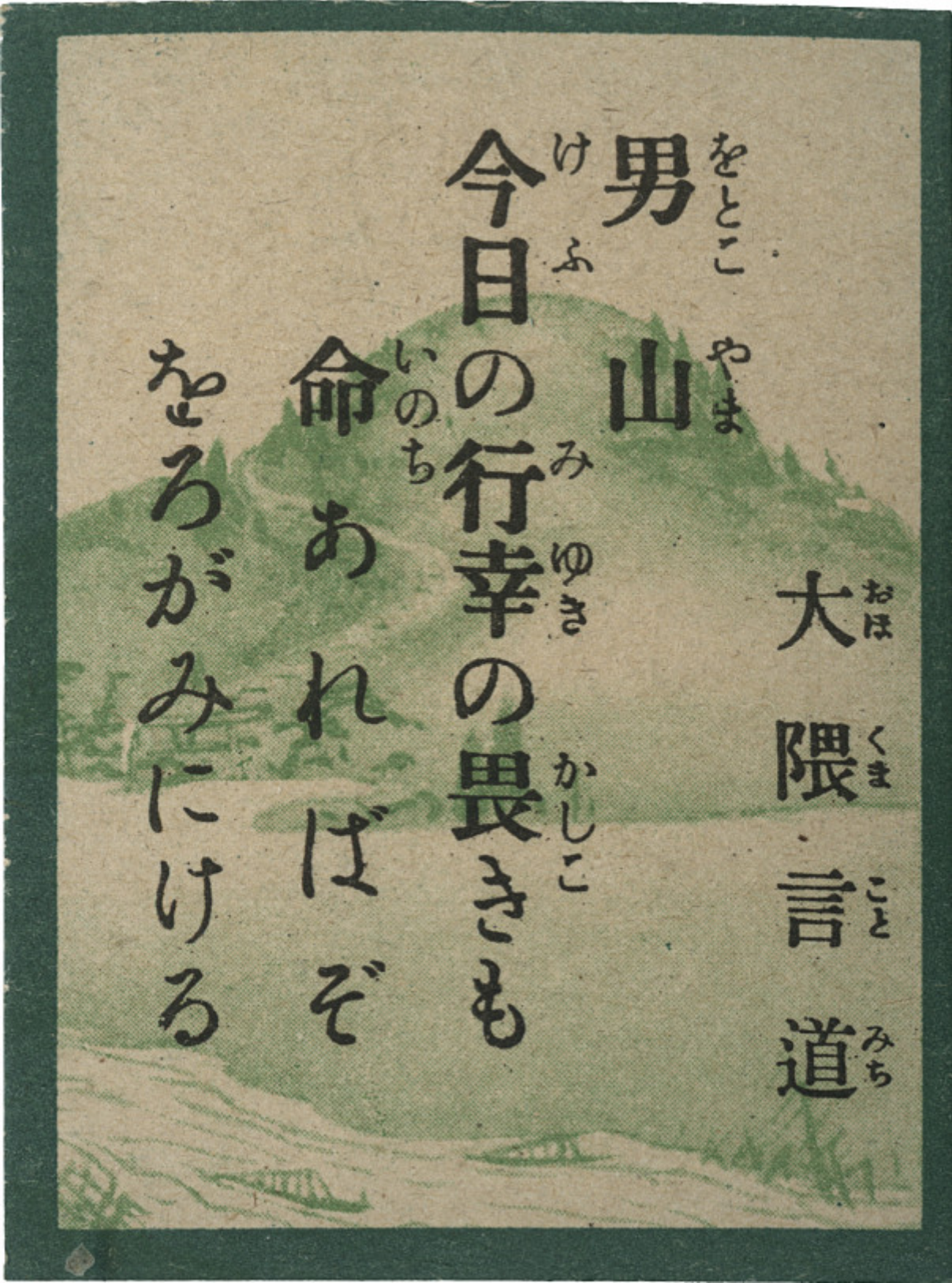

なかめかし
はみれとも
あすけり

ならふちし
まのまもり
ともかなな

ななよかふ
ともなにた
わむへき

安部女郎

わが背子はものな
念ほし事しあらば
火にも水にも
吾無けなくに



大隈言道

男山

今日の行幸の畏きも

命あればぞ

をろがみにける

佐久間象山

みちのくのそこなる
蝦夷(えぞ)のそこを漕(こ)ぐ
舟(ふね)より遠(とほ)く
物(もの)をこそ思(おも)へ

成尋阿闍梨母（じやうじんあじやりのはゝ）

もろこしも
天の下（あめのした）にぞ有（あ）りと聞（き）く
照（て）る日の本（ひのもと）を
忘（わす）れざらなむ

荒木田久老

初春の
初日かゞよふ神國の
神のみかげを
あふげ諸

山部赤人

あしびきの
山にも野にも御猟人
得物矢手挟みみだれたり見ゆ

三條西實隆

あふぎ來てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ

武田耕雲齋

片敷(かたし)きて
寝(いぬ)る鎧(よろひ)の袖(そで)の上(うへ)に
思(おも)ひぞつもる
越(こし)の白雪(しらゆき)

徳川光圀

行く川の
清き流におのづから
心の水も
かよひてぞすむ

高橋太一郎

鹿島なる
師靈の御劔を
こゝろに磨ぎて
行くはこの旅

藤原爲定

限なき
恵を四方にしき島の
大和島根は
今さかゆなり

橘枝直

天の原てる日にちかき
富士の嶺に
今も神代の
雪は殘れり

藤原師賢

思ひかね入りにし山を
立ち出でて
迷ふうき世も
たゞ君の爲

上田秋成

香具山の尾上に立ちて
見渡せば
大和國原
早苗さるなり

野村望東尼

武士の
やまと心をより合せ
たゞひとすぢの
大綱にせよ

多治比鷹主

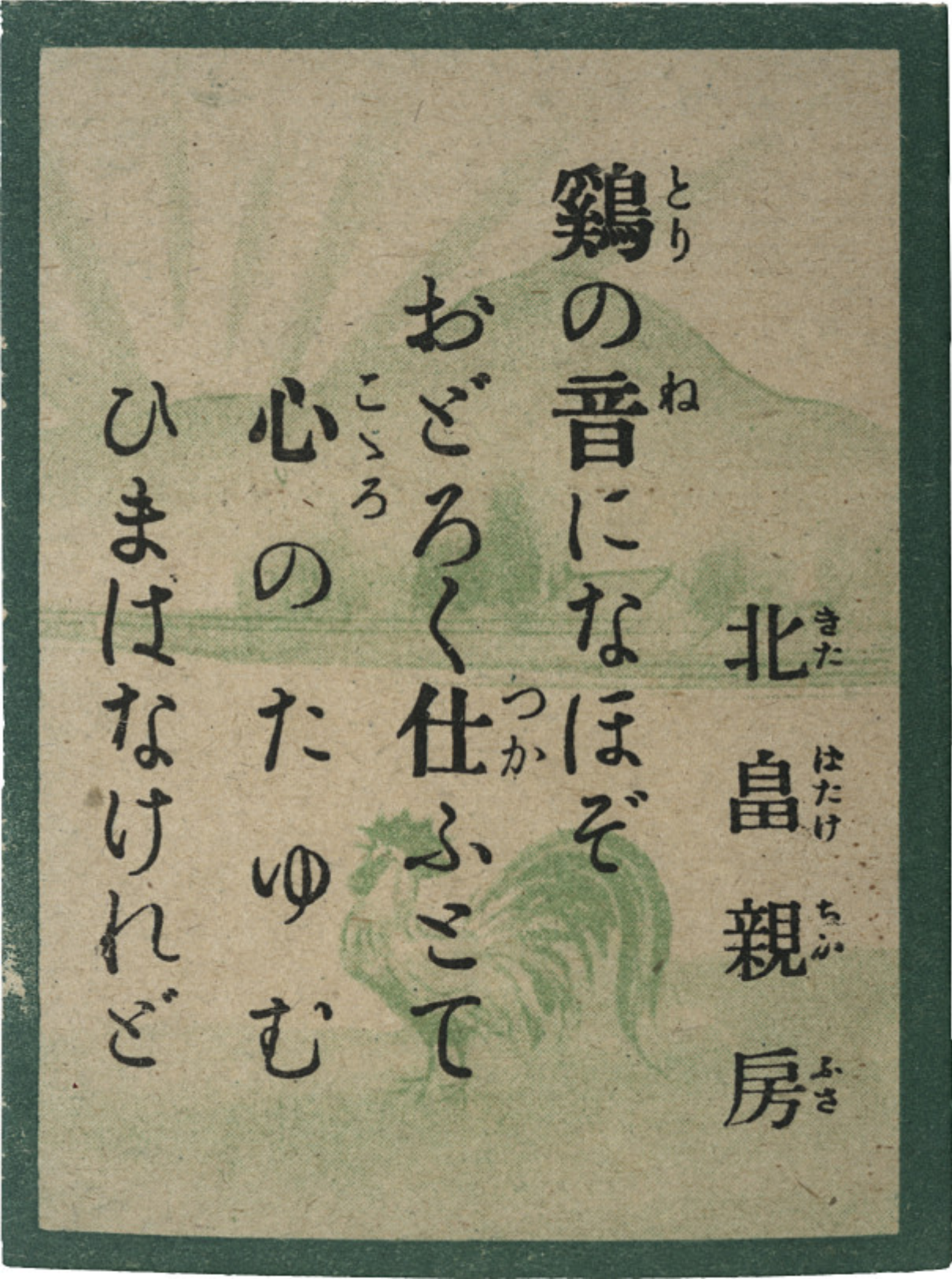
唐國(からくに)に往(ゆ)き足(た)らはして
歸(かへ)り來(こ)む
益荒猛夫(ますらたけを)に
御酒(みき)たてまつる

丈部人麻呂（はせつかべのひとまろ）

大君（おほきみ）の
命（みこと）かしこみ磯（いそ）に觸（ふ）り
海原（うのはら）渡（わた）る
父母（ちゝはゝ）を置（お）きて

林子平

千代（ちよ）ふりし
書（ふみ）もしるさず海（うみ）の國（くに）の
まもりの道（みち）は
我（われ）ひとり見（み）き



鶏(とり)の音(ね)になほぞ
おどろく仕(つか)ふこて
心(こころ)のたゆむ
ひまはなけれど

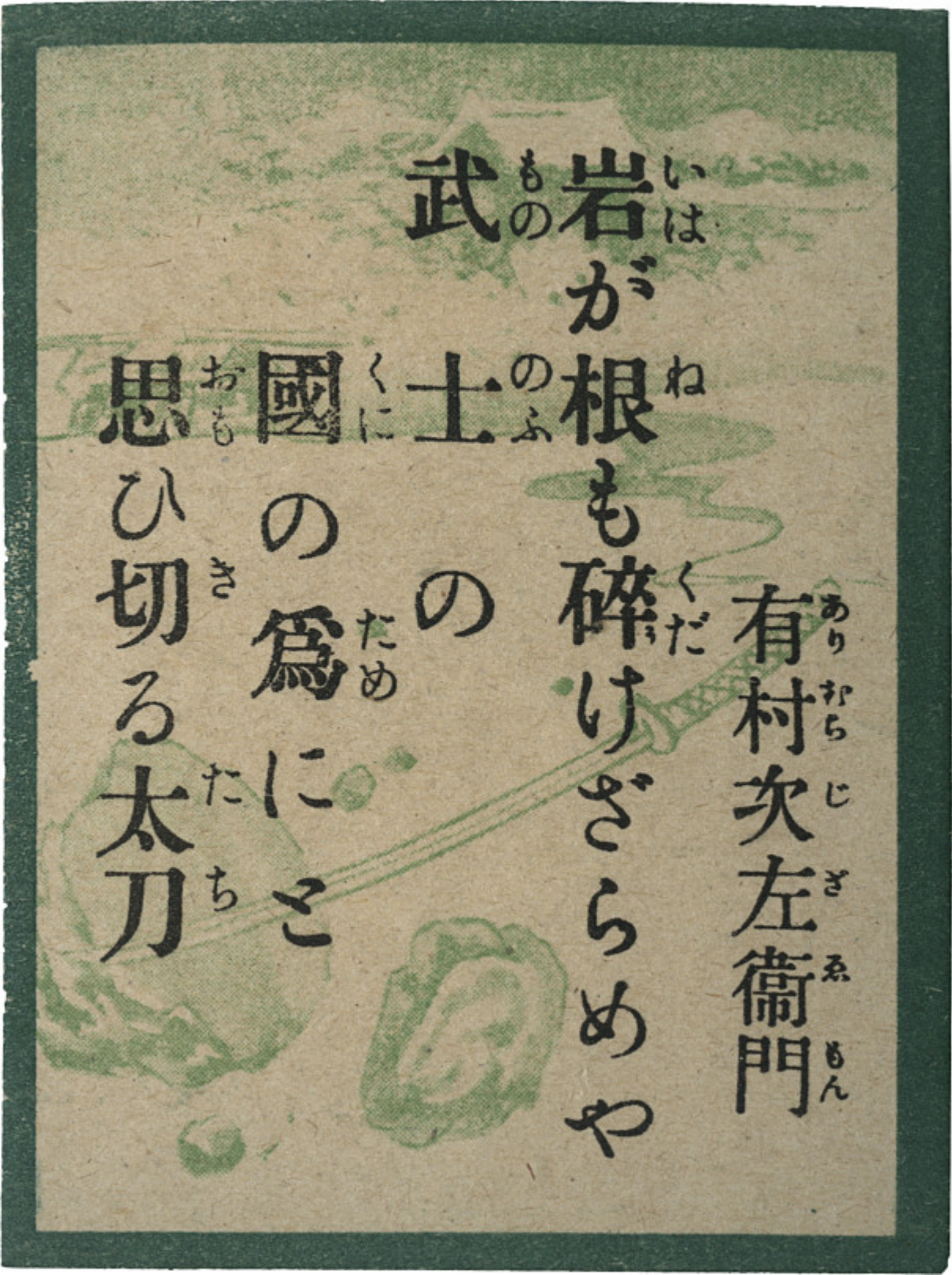
北畠親房(きたばたけちかふさ)

高山彦九郎

我(われ)を我(われ)こしろしめすかやすめらぎの
玉(たま)のみ聲(こゑ)のかかる嬉(うれ)しさ

澁谷伊豫作

ますらをが
思(おも)ひこめにし一筋(ひとすぢ)は
七生(なゝよ)かふこも
何(なに)たわむべき



有村次左衛門

岩が根も碎けざらめや

武士の

國の爲にこ

思ひ切る太刀

藤原爲氏

勅(ちよく)こして
祈(いの)るしるしの神風(かみかぜ)に
寄(よ)せくる浪(なみ)は
かつ砕(くだ)けつゝ

すめ神の天降りましける日向なる
高千穂の嶽やまづ霞むらむ

楫取魚彦

賀茂季鷹

おほやまと
大日本神代(かみよ)ゆかけて
傳(つた)へつる
雄々(を〻)しき道(みち)ぞ
たゆみあらすな

蒲生君平

遠つ祖の身によろひたる緋緘の面影浮ぶ木々のもみぢ葉

新納忠元

あぢきなやもろこし
までもおくれじと
思ひしことは
昔なりけり

君が代は
いはほと共に動がねば
くだけてかへれ
沖つしら浪

伴林光平

今奉部與曾布（いまつりべのよそふ）

今日（けふ）よりは
かへりみなくて大君（おほきみ）の
しこの御楯（みたて）と
出（い）で立つ吾（われ）は

笠金村

ますらをの弓上振り起し
丈夫の射つる矢を
後見む人は
語り継ぐがね

遣唐使使人母

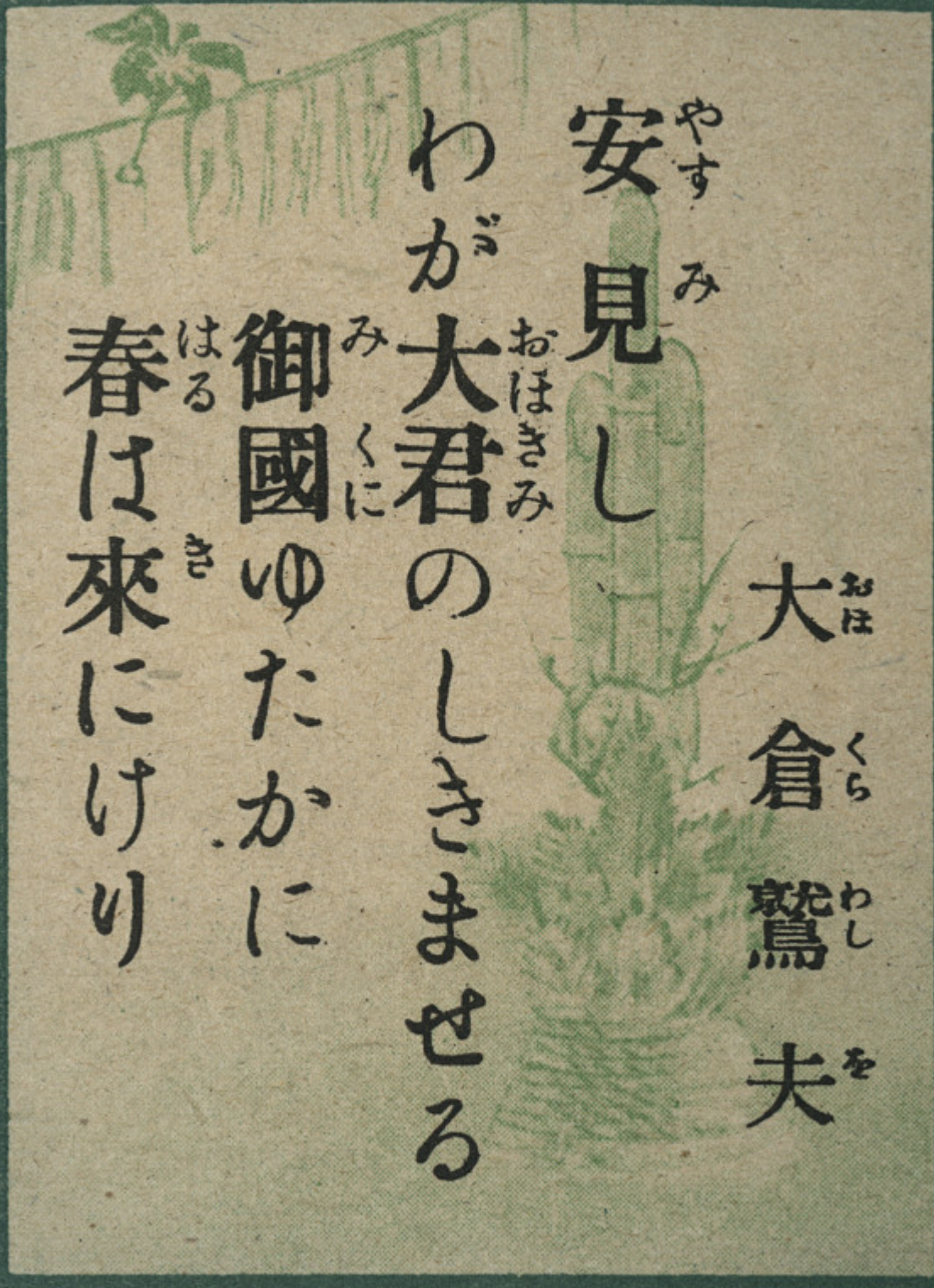
旅人の宿せむ野に霜降らば
吾が子羽ぐくめ天の鶴群

長奥麻呂

大宮の
内まで聞ゆ網引すこ
網子こゝのふる
海人の呼聲

高橋蟲麻呂（たかはしのむしまろ）

千（ち）萬（よろづ）の
軍（いくさ）なりとも言擧（ことあげ）せず
取（と）りて來（き）ぬべき
男（をのこ）こそ念（をも）ふ



大倉鷲夫

安見(やすみ)し
わが大君(おほきみ)のしきませる
御國(みくに)ゆたかに
春(はる)は來(き)にけり

君が代はつきじとぞ
思ふ神風や

みもすそ川の
すまむ限は

源経信

菊池武時

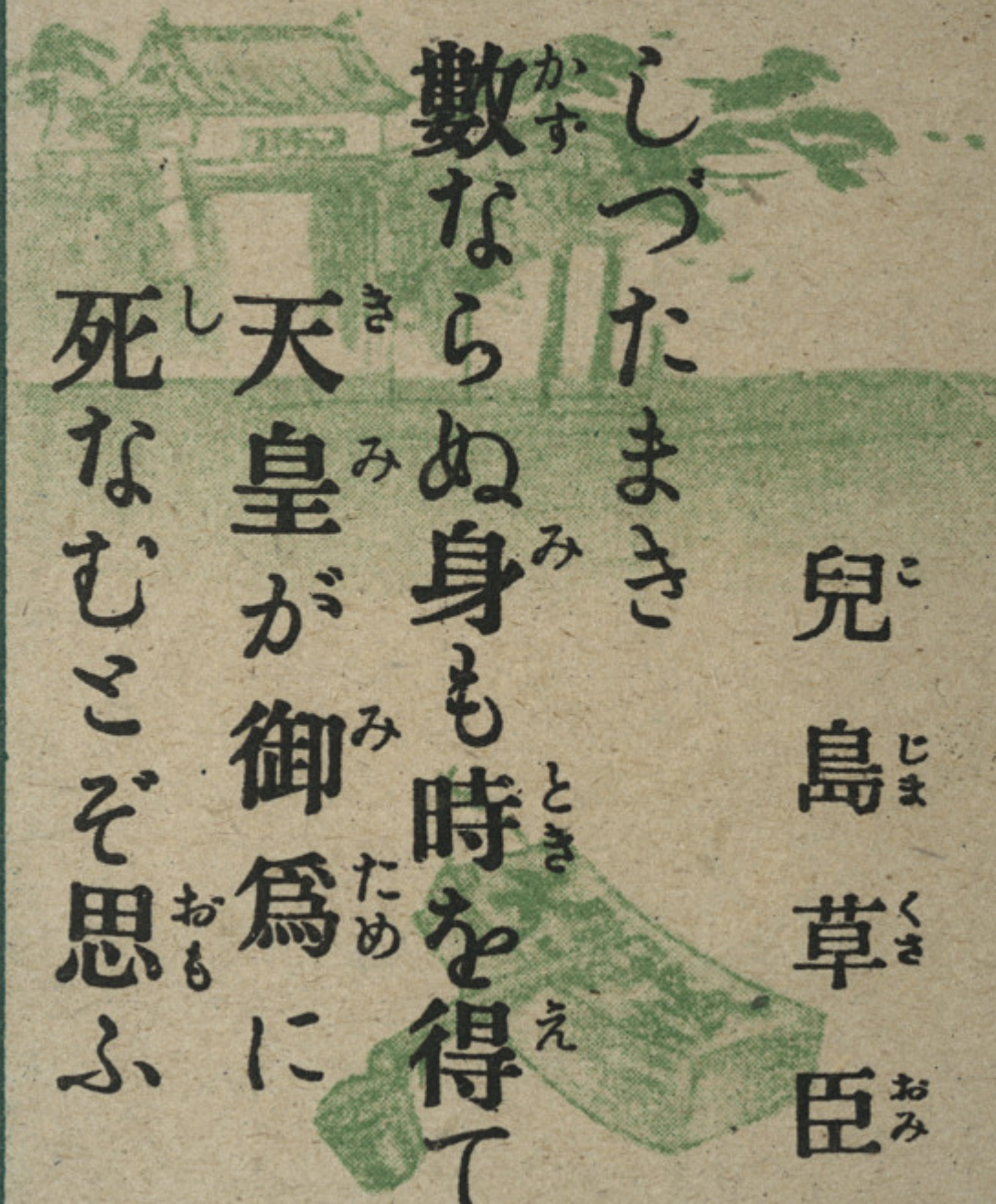
もの、ふの
上矢のかぶら一筋に
思ふ心は
神ぞ知るらむ

吉田松陰

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも
留め置かまし大和魂

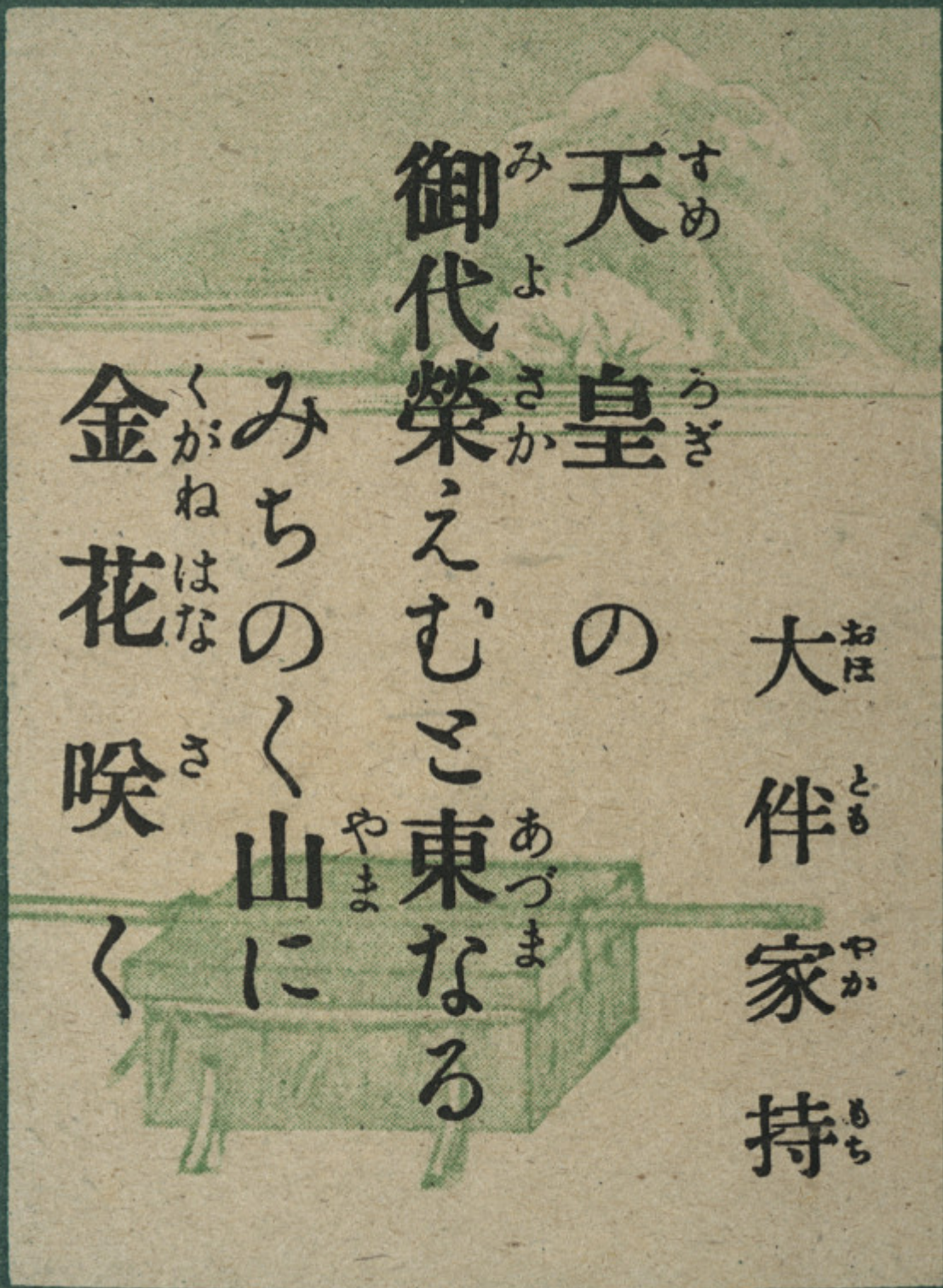
藤原定家

曇りなき
みどりの空を仰ぎても
君が八千代を
まづ祈るかな



兒島草臣

しづたまき
數ならぬ身も時を得て
天皇が御爲に
死なむこそ思ふ



大伴家持

天皇の
御代榮えむと東なる
みちのく山に
金花咲く

大中臣輔親（おほなかとみのすけちか）

山（やま）のごと
坂田（さかた）の稲（いね）を抜（ぬ）き積（つ）みて
君（きみ）が千歳（ちとせ）の
初穂（はつほ）にぞ春（つ）く

栗田土満

かけまくも
あやに畏(かしこ)きすめらぎの
神(かみ)のみ民(たみ)こ
あるが樂(たぬ)しさ

香川景樹

一方に
靡きそろひて花すゝき
風吹く時ぞ
みだれざりける

津田愛之助

大君の御楯となりて
捨つる身と
思へば輕き
わが命かな

中臣祐春

西の海
よせくる波も心せよ
神の守れる
やまこ島根ぞ

梅田雲濱

君が代を
思ふ心のひとすぢに
吾が身ありとも
おもはざりけり

佐久良東雄

天皇（おほきみ）に仕（つか）へまつれと
我（われ）を生（う）みし
我（わ）がたらちねぞ
尊（たふと）かりける

眞木和泉

大峰の山の岩根に埋めにけり
わが年月の
日本だましひ

雪宅麻呂

大君の
命かしこみ大船の
行のまにまに
やどりするかも

坂田部麻呂（さかたべのまろ）

眞木（まけ）柱（はしら）

ほめて造（つく）れる殿（との）のごと

いませ母刀自（ははとじ）

面變（おめがは）りせず

徳川齊昭

天ざかる蝦夷を
わが住む家こして
並ぶ千島の
まもりこもがな

命(いのち)をば
かろきになして武士(もののふ)の
道(みち)よりおもき
道(みち)あらめやは

源(みなもとの)致雄(むねを)

森迫親正

いのちより名こそ
惜しけれ武士の
道にかふべき
道しなければ

加納諸平

君がため花散りにし
ますらをに
見せばやと思ふ
御代の春かな

足代弘訓

我が國は
いこもたふこし天地の
神の祭を
まつりごとにて

石川依平

大君（おほきみ）の
御贄（みにへ）のまけこ魚（うを）すらも
神代（かみよ）より
仕（つか）へきにけれ

君(きみ)がため命死(いのちし)にきと世(よ)の人(ひと)に
語(かた)り繼(つ)ぎてよ峰(みね)の松(まつ)風(かぜ)

松本奎堂(まつもとけいだう)

有馬新七

朝廷邊(みかどべ)に死(し)ぬべき
いのちながらへて
歸(かへ)る旅路(たびぢ)の
憤(いきどほ)ろしも

宏覺禪師

末の世の末まで我が國は
よろづの國にすぐれたる國

藤原良經

昔(むかし)たれ
かゝる櫻(さくら)の花(はな)を植(う)ゑて
吉野(よしの)を春(はる)の
山(やま)となしけむ

神人部子忍男

ちはやぶる
神の御坂に幣奉り
齋ふいのちは
母父が爲

御民吾生ける驗あり天地の榮ゆる時に遇へらく念へば

海犬養岡麻呂

山上憶良（やまのうへのおくら）

をのこやも
空（むな）しかるべき萬代（よろづよ）に
語（かた）り繼（つ）ぐべき
名は立（た）てずして

橘諸兄（たちばなのもろえ）

降（ふ）る雪（ゆき）の
白髪（しろかみ）までに大皇（おほきみ）に
仕（つか）へまつれば
貴（たふと）くもあるか

大田部荒耳（おほたべのあらみゝ）

天（あめ）の神（かみ）を祈（いの）りて幸矢（さつや）貫（ぬ）き
地（つち）の筑紫（つくし）の島（しま）を
さして行（い）く吾（われ）は

源実朝（みなもとのさねとも）

山（やま）はさけ海（うみ）はあせなむ
世（よ）なりとも
君（きみ）にふた心（ごころ）
わがあらめやも

下河邊長流

富士の嶺に
登りて見れば天地は
まだいくほども
わかれざりけり

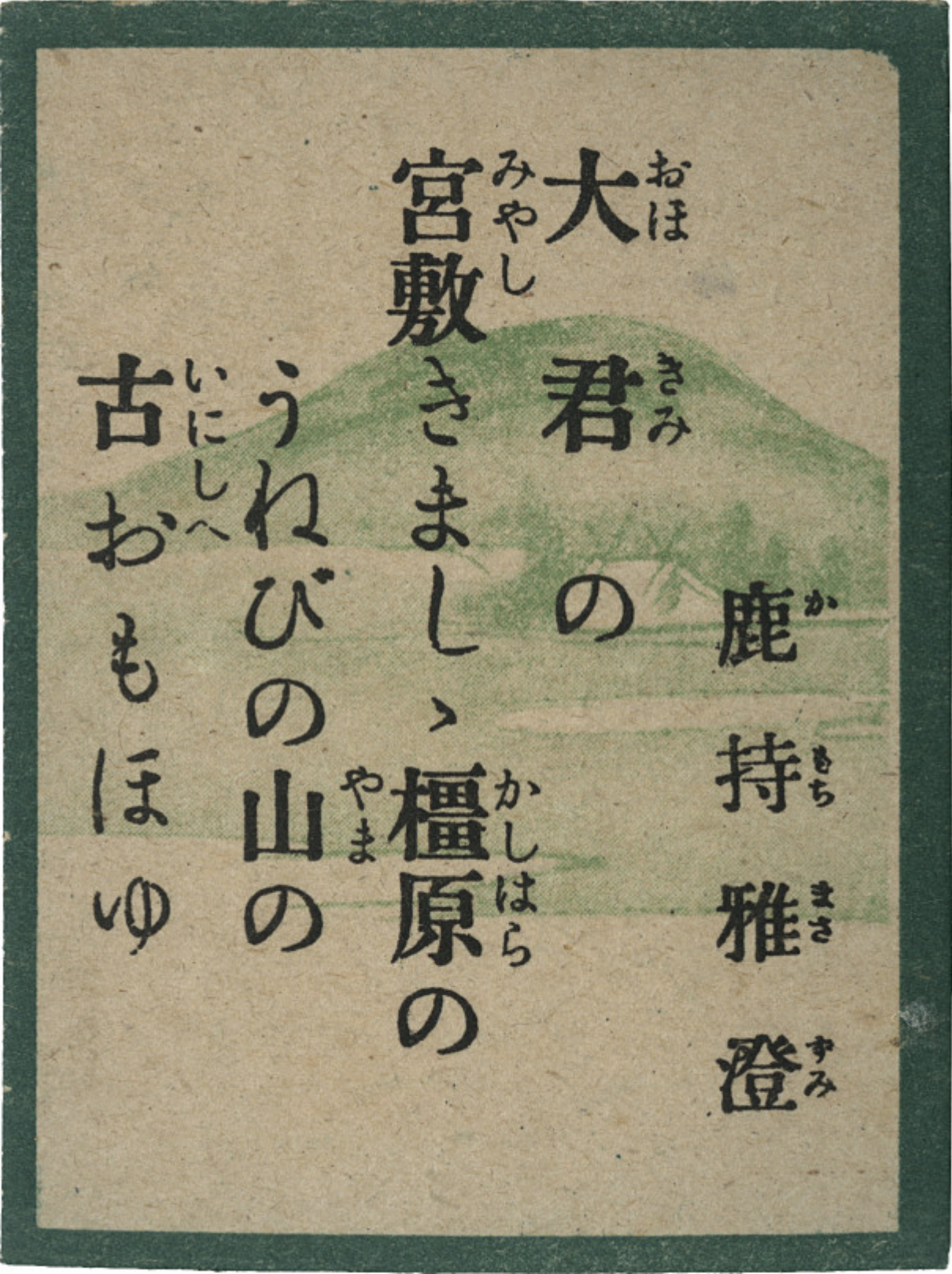
平田篤胤

あを青海原

しほ潮の八百重の八十國に

つぎてひろめよ

この此の正道を



鹿持雅澄

大君の
宮敷きましゝ橿原の
うねびの山の
古おもほゆ

平野國臣

青雲のむかふす極

すめらぎの

御稜威かがやく

御代になしてむ

葛井諸會

新しき
年のはじめに豊の年
しるすこならし
雪の降れるは

久坂玄瑞

取り佩ける
太刀の光はものゝふの
常にみれども
いやめづらしき

楠木正行

かへらじと
かれて思へば梓弓
なき數に入る
名をぞこゞむる

皇（おほきみ）は
神（かみ）にしませば天雲（あまぐも）の
雷（いかづち）の上（うへ）に
廬（いほり）せるかも

柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）

大伴旅人（おほとものたびと）

安見（やすみ）し、
わが大王（おほきみ）の食國（をすくに）は
大倭（やまと）も此處（ここ）も
同（をな）じこそ念（おも）ふ

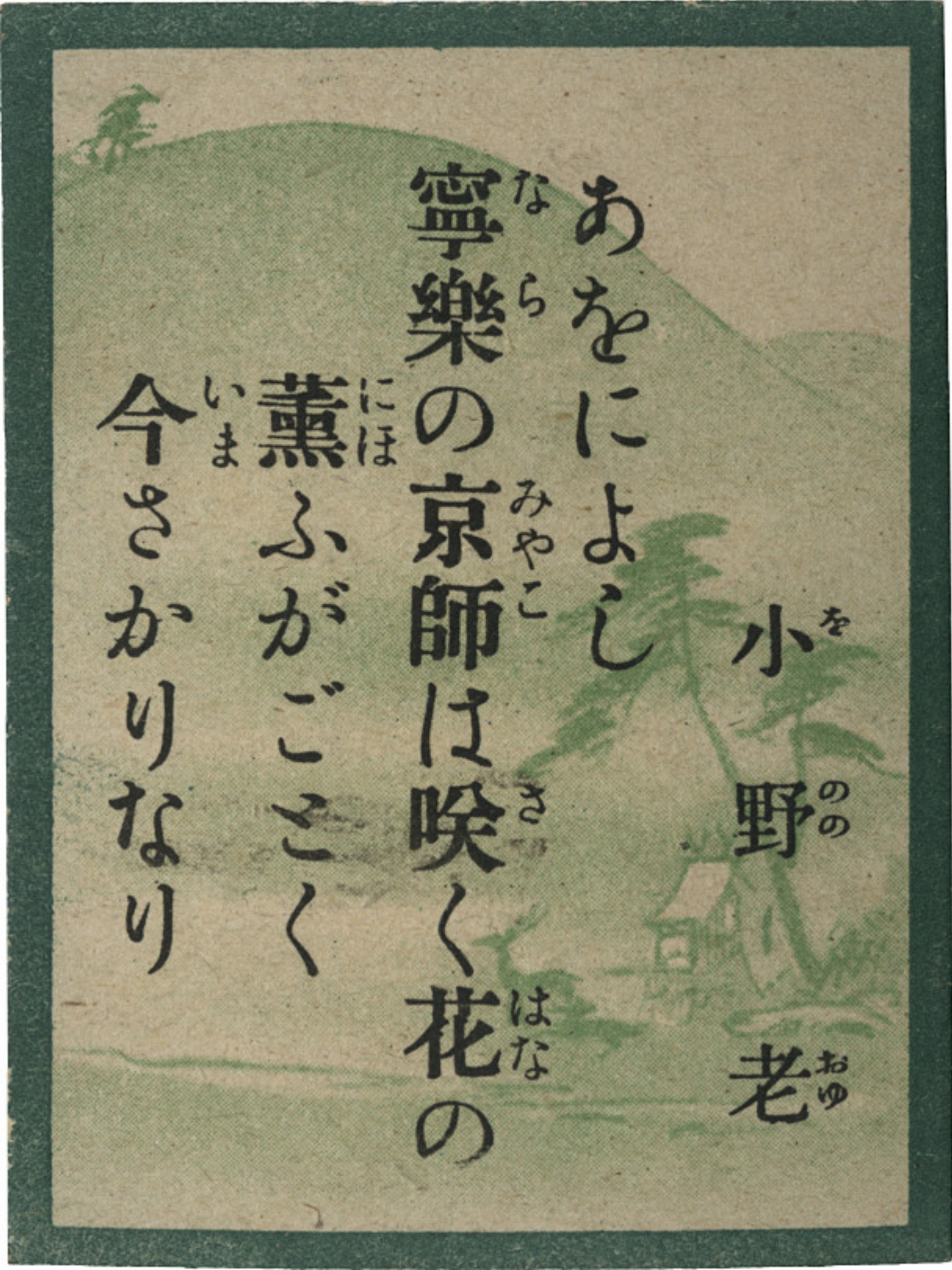
尾張濱主を

翁(おきな)こてわびやは居(を)らむ

草(くさ)も木(き)も

榮(さか)ゆる時(とき)に

出(い)でて舞(ま)ひてむ



小野老（をのおゆ）

あをによし
寧樂（なら）の京師（みやこ）は咲く花（はな）の
薫（にほ）ふがごとく
今（いま）さかりなり

天の下

紀清人

すでに覆ひて降る雪の

光を見れば

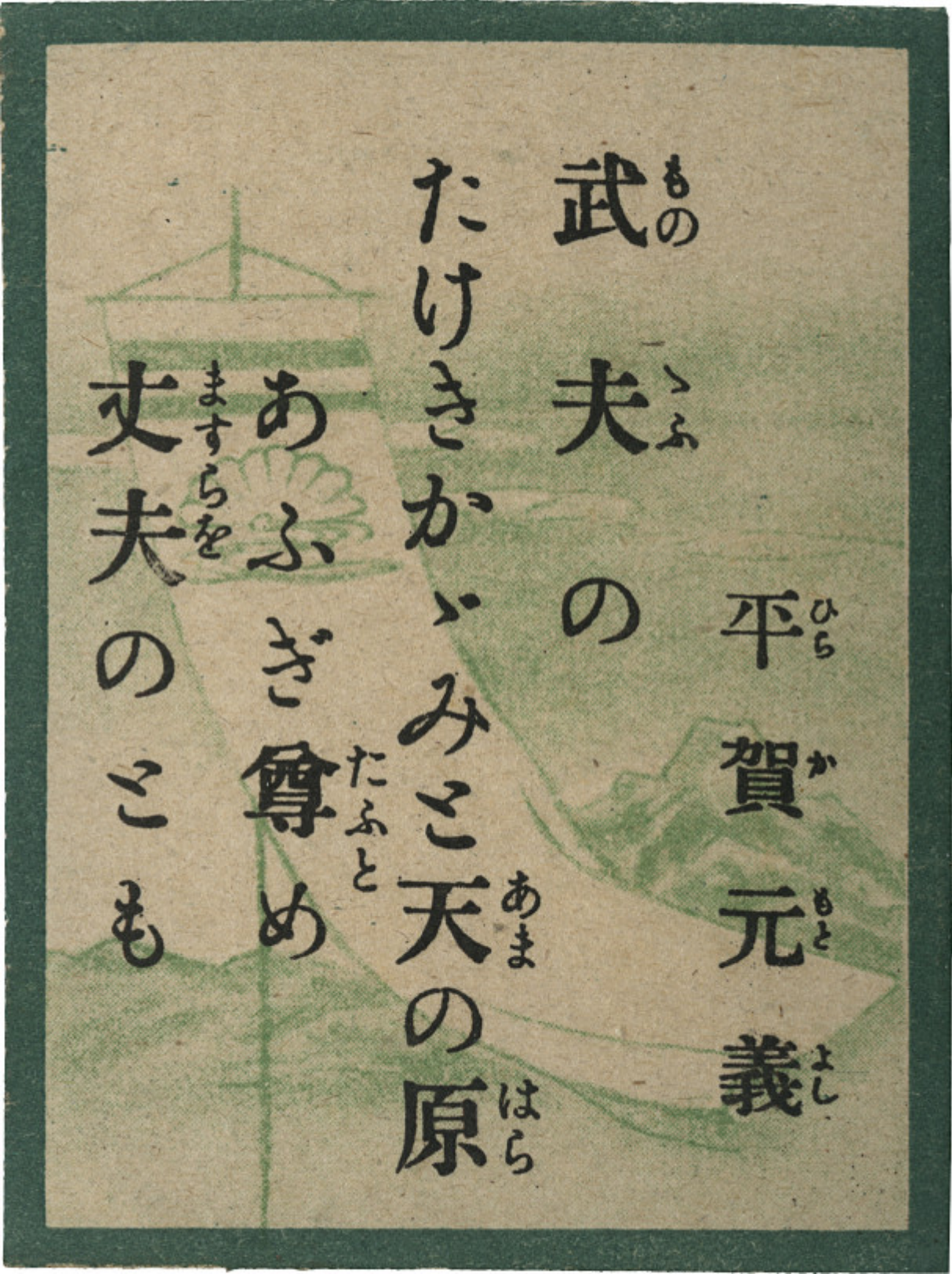
貴くもあるか

君(きみ)が代(よ)に
あへるは誰(たれ)も嬉(うれ)しきを
花(はな)は色(いろ)にも
出(い)でにけるかな

藤原範兼(ふぢはらのりかね)

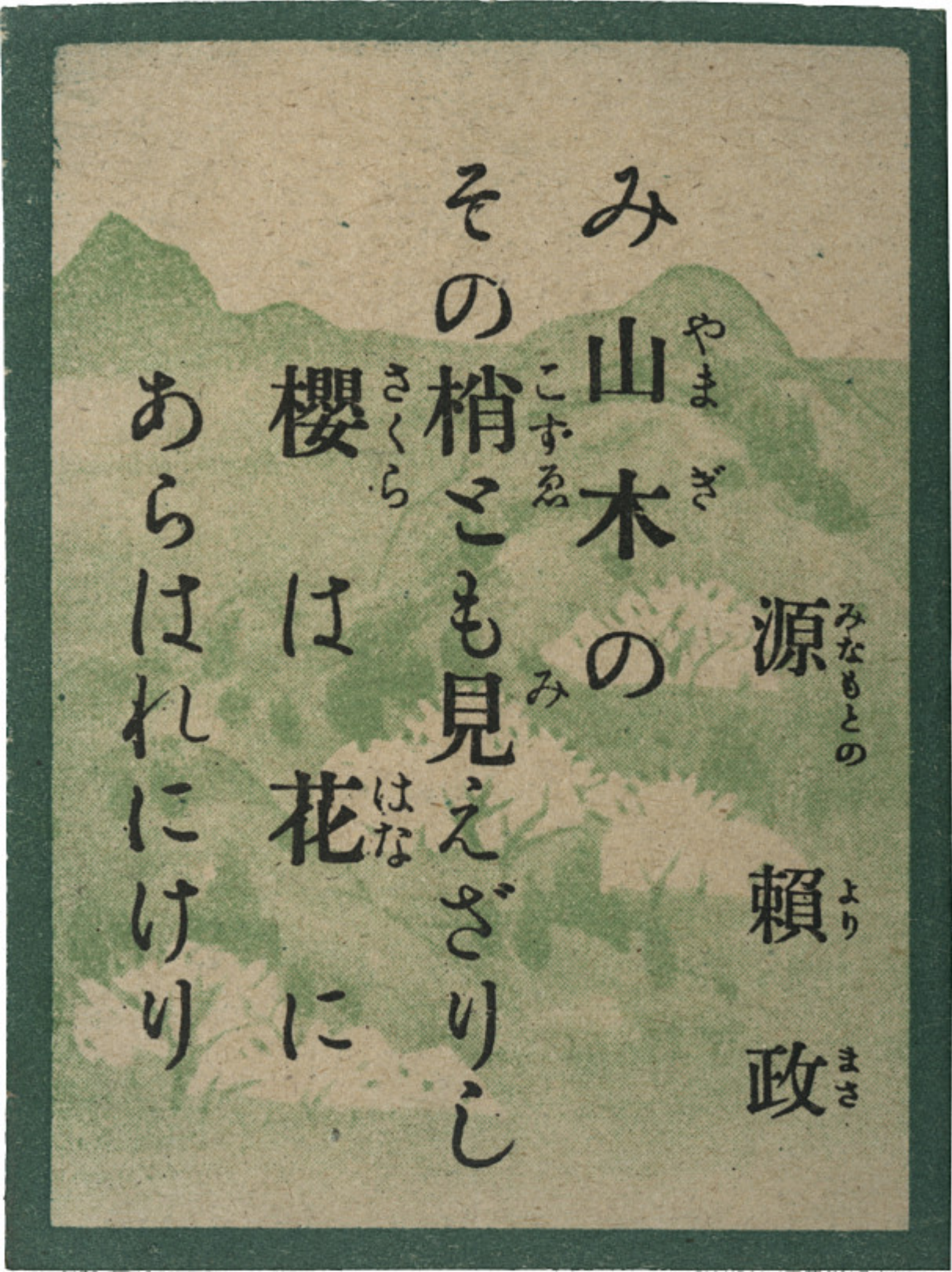
藤原俊成

君が代は千代ともさゝじ天の戸やいづる月日のかぎりなければ



平賀元義

武夫の
たけきかゞみこ天の原
あふぎ尊め
丈夫のこも


み山木(やまぎ)の
その梢(こずゑ)も見(み)えざりし
櫻(さくら)は花(はな)に
あらはれにけり
源(みなもとの)頼(より)政(まさ)

僧月照

大君（おほきみ）のためには何（なに）か惜（お）しからむ
薩摩（さつま）のせとに身（み）は沈（しづ）むとも

ふみわけよ
日本(やまと)にはあらぬ唐鳥(からとり)の
跡(あと)を見(み)るのみ
人(ひと)の道(みち)かは

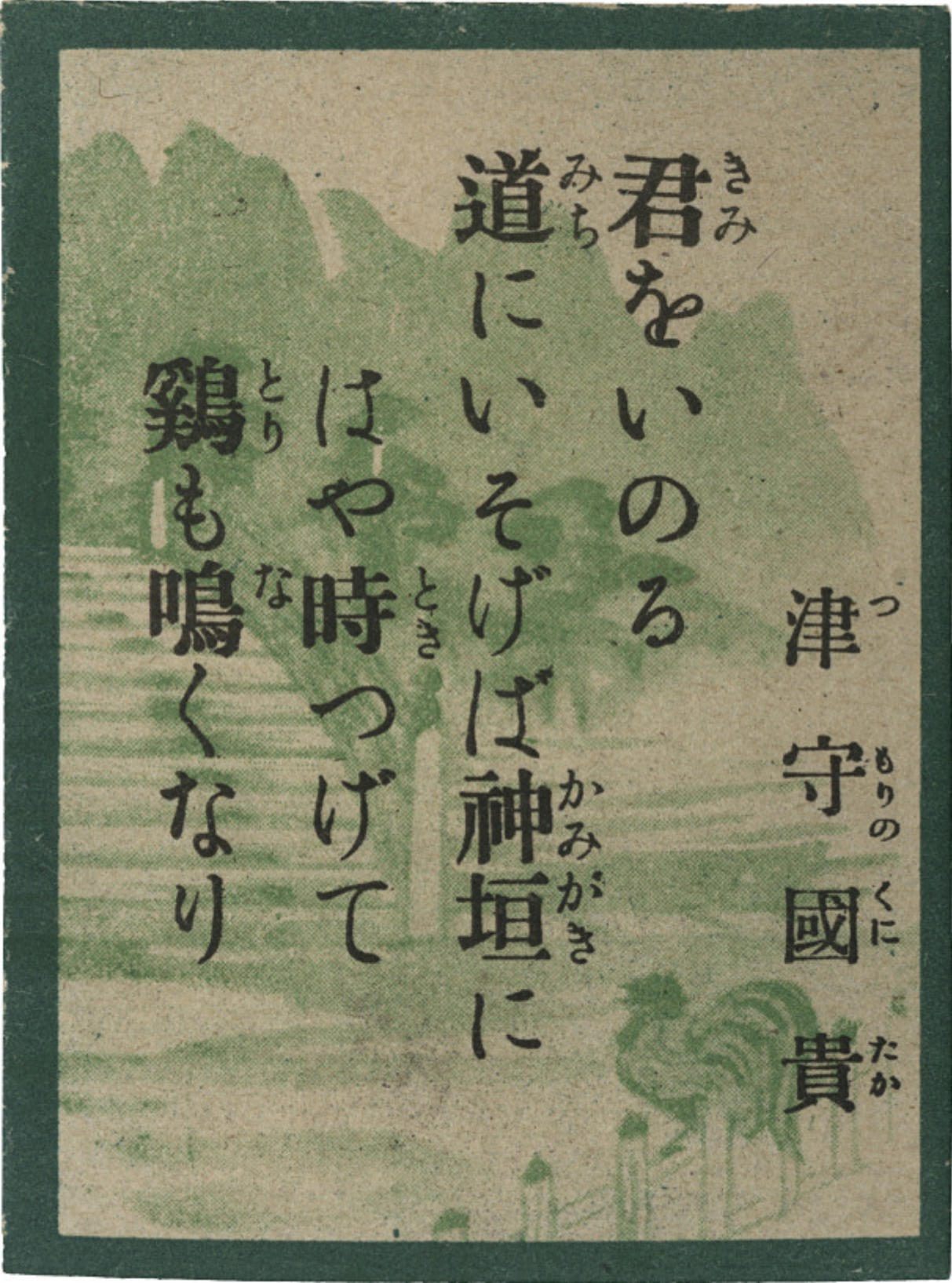
荷田(かだの)春満(あづままろ)

天皇の御楯となりて
死なむ身の
心は常に
樂しくありけり

鈴木重胤

津守國貴

君をいのる
道にいそげば神垣に
はや時つげて
鶏も鳴くなり



菅原道眞

海ならず
たゝへる水の底までも
清き心は
月ぞ照らさむ

藤田東湖

かきくらす
あめりか人に天つ日の
かがやく邦の
てぶり見せばや

春にあけて
まづみる書も天地の
はじめの時と
讀み出づるかな

橘曙覽

小澤蘆菴

あし原や
この國ぶりの言の葉に
榮ゆる御代の
聲ぞ聞ゆる

吉村虎太郎

曇(くも)りなき
月(つき)を見(み)るにも思(おも)ふかな
明日(あす)はかばねの
上(うへ)に照(て)るやこ

本居宣長

しきしまの
やまと心を人とはゞ
朝日にほふ
山ざくら花

賀茂眞淵

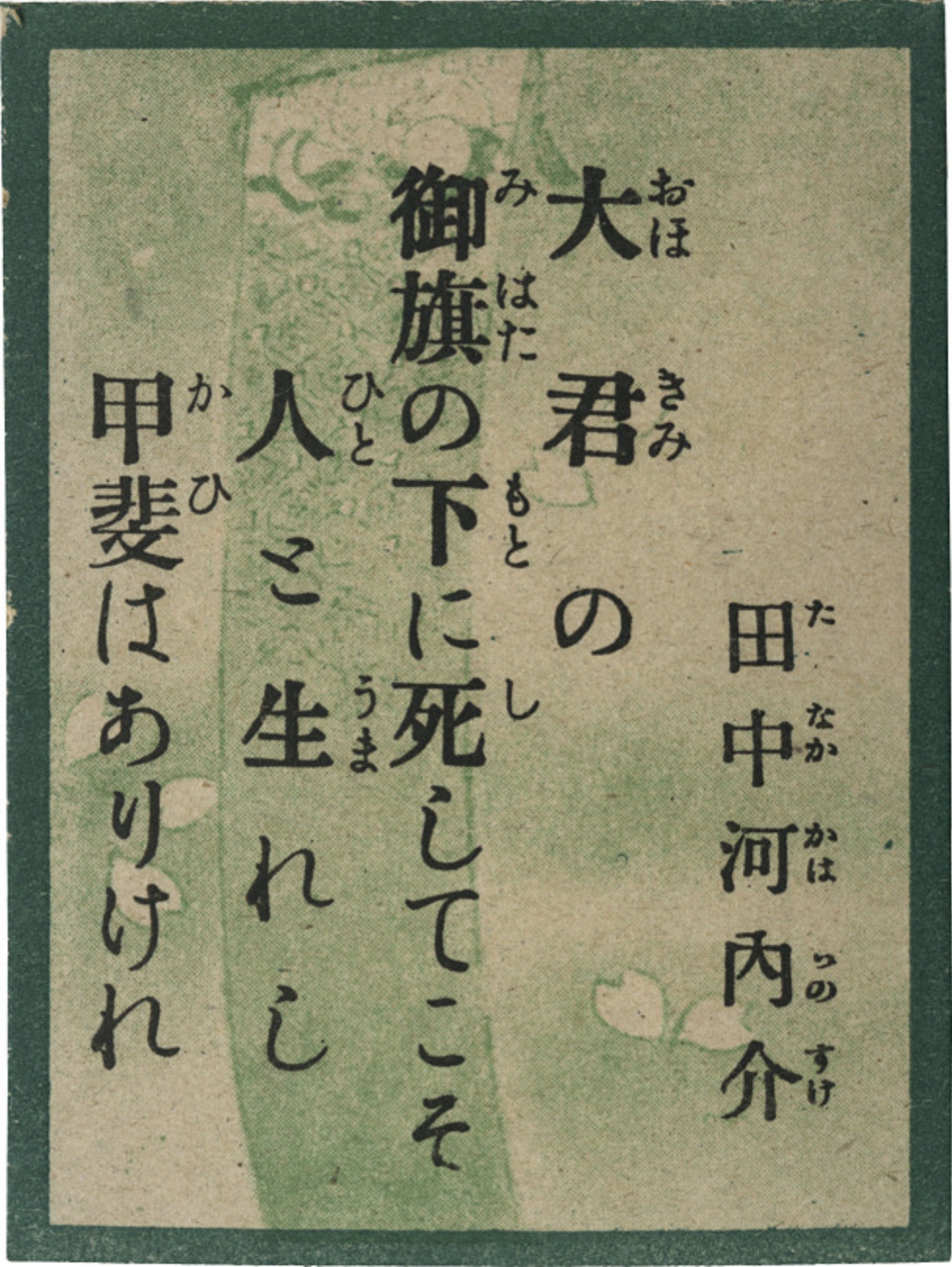
大御田の水泡も泥も
かきたれて
ころや早苗は
我が君の爲

高杉晋作

後(おく)れても
後(おく)れてもまた君(きみ)たちに
誓(ちか)ひしことを
われ忘(わす)れめや

大舍人部千文（おほとねりべのちふみ）

霰（あられ）降（ふ）り
鹿島（かしま）の神（かみ）を祈（いの）りつつ
皇軍（すめらみくさ）に
吾（われ）は來（き）にしを



田中河内介

大君の
御旗の下に死してこそ
人と生れし
甲斐はありけれ

情報局認定
日本文學報國會選定
協力每日新聞社
絵入
愛國百人一首
後援
陸軍省
海軍省
文部省
大政翼賛會
日本放送協會
京都 田村將軍堂謹製

百人一首

愛國百人一首

昭和十七年十二月二十日印刷
昭和十七年十二月廿五日發行
昭和十八年一月廿五日再版發行

選定　日本文學報國會
京都市下京區新町通正面下ル平野町七八七番地
印刷兼製造者　田　熊二郎
京都市下京區通松原柳馬場角二九四番地
印刷所　高橋朝陽堂
京都市下京區新町通正面下ル平野町七八七番地
發行所　田村將軍堂
電話下⑤一六九一番
振替京都七七二五番

【意匠不許複製】

㊟愛一　定價一圓

九大井藤
No. 18
1.33

規格 愛 一
登録 定價 ¥1.00
日本玩具統制協會
登録番号 1364